

宮沢賢治「文語詩未定稿」評釈一

信時 哲郎

1 「曇りてとざし」

曇りてとざし

風にゆる

それみづからぞ樹のこゝろ

光にぬるみ

気に析くる

そのこと巖のこゝろなり

樹の一本は一つの木

規矩なき巖はたゞ巖

大意

雲が空をとざしている中を

ただ風にゆれている

それが樹の心というものだ

光であたためられ

空気で風化されていく

それが岩の心というものだ

一本の樹とは一本の木である

規範のない岩はただの岩である

モチーフ

文語詩にしては、凝縮化が進む前のものであるためか、さして難解な語も見当たらない口語詩的な作品。通常ならば「動かないもの」の代表でもある樹と巖を、それぞれ動くものであると捉え、それを樹や巖の「こゝろ」であるとしているところに科学者・賢治の姿を認めることもできるかもしれない。最終連の解釈は難解だが、テーマは仏教的に言えば諸行無常、また山川草木悉皆仏性の表現であろう。

語注

折くる 先行する口語詩「こゝろ」の下書稿(三)には「霜には折ける」とルビがある。温度や湿度の変化によつて岩石が風化していくことを指すのだろう。

規矩 先行する口語詩「こゝろ」の下書稿(三)には「のり」のルビ。通常は「きく」と読み、考えや行動の基準となるものことで、規則や法則、手本のことを指す。

評釈

赤罨詩稿用紙に「春と修羅 第二集」所収の「三八三 鬼言(幻聴) 一九二五、一〇、一八、」が書かれ、その上部余白に先行作品である口語詩「こゝろ」が書かれて×が付され(十字にも見える)、その下部余白に書かれているのが下書稿(口語詩「こゝろ」は『新校本全集五』所収)。現存稿は一種のみ。文語詩の直前稿にあたる口語詩「こゝろ」は次のとおり。

光にぬるみ

気に析くる

そのこと巖のこゝろなり

曇りてとぎし

風にゆる

それみづからぞ樹のおもひ

樹の一本は一つの木

規矩なき巖はたゞ巖

文語詩への書き換えに際しても、連の入れ替えがあることを除けば、特記すべき変更は加えられていない。口語詩の下書稿は三種あるが、こちらにも本質的な変化はないように思われる。ただ、最終連は少し引つかかる。

「樹の一本は一つの木」とは、そこまでの意味内容からすると、それぞれの樹木は、それぞれの特性を持っているだろうが、木そのものの「こゝろ」は同じである、といった意味であろう。「樹」と「木」で使い分けをしているようだが、『新選漢和辞典』によれば、「樹」には「立っている木」の意味があったようだ。そうしたことから、個としての「樹」と、種としての「木」に書き分けることを思いついたのかもしれない。

さらに難解なのは「規矩なき巖はたゞ巖」だ。「きまりがない巖などは、ただの巖にしかすぎない」と読めるが、「規矩のない巖」が存在してしまつては、巖には巖の共通した「こゝろ」がある、という思想と離れてしまう。口語詩の下書稿(二)の最終形態(タイトルは「こゝろ」)は、次のようなものだ。

陽になまぬるみ

気流にゆらぎ、

しづかに水を吸ひあげる

そのことそれが樹のこゝろだ

苔にしめり

ときには稜を風に鳴らす

それみづからが巖のこゝろ

一本の木は一本の木

さだめない巖はたゞその巖

「さだめない」と言われてみれば、定まっていな、つまり、無常、常に同じではない、という意味に解釈することができ。だとすれば「常に同じ姿でいるわけではない巖は、それこそが巖自身の「こゝろ」の現れなのだ」と取れるように思う。

そこから「規矩」が導き出されたとすると、「規矩」とは、本質を見抜くことができず、巖が永遠に変わらない存在であるように思いこむ浅薄なきめごとだと解釈できようか。つまり、人間は巖の形や色、大きさなどに目を奪われがちだが、地球の成り立ちからすればあまりに表面的なことであり、変わりゆくことこそが巖の「こゝろ」なのだ、といった意味になろう。

『春と修羅（第一集）』の「雲の信号」には、「山はぼんやり 岩頸だつて岩鐘だつて／みんな時間のないころのゆめをみてゐるのだ」とあるが、「時間のないころのゆめ」とは、つまり、人間が時間などといった「規矩」を作る以前の時代、ということであろう。人間の感性からすると、山や岩は

不変のもののように見えているが、それは人間の生きている時間あまりにも短いための表面的な認識にすぎず、山も岩も生々流転している存在であり、人間の独善的な感覚が岩の本来のあり方を見えにくくしてしまっている、という思想が背景にあるのだろう。

口語詩の下書稿(一)に「風のぬるみや水湿を／大古のやうにぼんやり感ずる」ともあり、「時間のないころのゆめ」にも似た表現があるが、ここでも人間が決めたきまりや基準から超えているということを言おうとしていたのだろう。

『春と修羅（第一集）』の序詩に、「けだしわれわれがわれわれの感官や／風景や人物をかんずるやうに／そしてたゞ共通に感ずるだけであるやうに／記録や歴史 あるいは地史といふものも／そのいろいろの論料データといつしよに／（因果の時空的制約のもとに）／われわれがかんじてゐるのに過ぎません」とあるが、ここで展開される内容にも通じていよう。しかし、もう一つわかりにくい点がある。「樹のこゝろ」と「巖のこゝろ」を、賢治は果たして生物と非生物として対比的に描こうとしたのかどうか、ということである。

さらに生物について、賢治は動物と植物とで分ける気があったのだろうか。また、「樹」でも「巖」でもない、私たち人間について、賢治はどういう意識でいたのだろうか……

直接に答えることはむずかしいが、本作の特徴は、人間の生

まれる以前から地球にあった「樹」と「巖」に対して、賢治は共通する属性として「風にゆる」「気に析くる」と、「動くこと」に着目したことはないかと思う。

動物とは「動く物」であるが、それに対して「植えられた物」である植物は、動かない物、移動力を欠いた生物のことを指している。もちろんミドリムシのように活発に動くものはあるにしても、それは特殊な例だ。

また、通常ならば「動かざること山の如し」という言葉があるように、「動かないこと」が、その第一の属性としてあげられるような山、そして「巖」に対しても、賢治は「気に析くる」こと、やはり動くことを「巖のこころ」だとしているところがポイントであると思う。

鈴木健司（「岩頸」意識について）＞現実＜と＞心象＜
『宮沢賢治文学における地学的想像力』＞心象＜と＞現実＜の谷をわたる』蒼丘書林 平成二十三年五月）は、岩頸幻想として、賢治が岩頸をによきによきとのびゆく奇妙なものだとして描き、実際にそう感じていたのではないかと書いており、「『百篇』の「岩頸列」でも、その発想を文語詩化していた（『『百篇評釈』』）。ここでも賢治が「巖」が動くことをもって、その「こころ」だとしているのは、科学的知識が先か、感覚が先なのかは分からないにせよ、発想的に通じるものがあつたように思う。

こうして考えてみれば、賢治は「樹」と「巖」をほとんど同列に扱っていたと言ってもよいように思う。

植物ならまだしも、人間の肉眼では動いていることがわからない「巖」にまで、「動くこと」「こころ」だと賢治は書いた。地質学者・賢治の面目躍如といったところだが、それが生々流転、諸行無常、つまりあらゆる存在は、常に形を変え、同じ姿でありつづけるものはないという仏教的思想を表現したものであるとも考えられる。また、仏教思想に山川草木悉皆成仏という言葉がある通り、人間のみが仏性をもち、成仏できるとはなく、草木でさえも、そして山川でさえも仏性をもち、成仏の可能性があるという思想にも通じているということもできるかと思う。

こうして書いてくると、本作は科学者として、宗教家として、詩人として生きた賢治を十二分に語ってくれる名作のようにも思えるのだが、なぜ未定稿のままなのか気になる。しかも文語詩詩定稿に発展していくものが多い『新校本全集5』所収の口語詩群中にありながら、本作は比較的初期に文語詩化が断念されているのがなぜなのか疑問となる。その理由を無理に考えてみれば、日々の生活で出会った具体的な事象から文語詩が書かれることが多いのに、本作は、あまりに科学的・仏教的思想がストレート且つ教条的に出てしまっていることを嫌った、ということなのかもしれない。

もちろん、これは現状からの判断に過ぎない。賢治は未定稿の紙片を収めた黒クロス表紙に「文語詩稿／本稿想未だ熟せず 表現／元より定まらざるもの／発表を要せず」と書いている。未だに思想が熟していないだけで、いつか想が熟したら、発表する機会も訪れるだろう： そう解釈できないこともないと思う。

先行研究

なし

2 「ひとびと酸き胡瓜を噛み」

ひとびと酸き胡瓜を噛み

やゝに濁れる黄の酒の

陶の小盃に往復せり

そは今日賦役に出でざりし家々より

権左エ門が集め来しなれ

まこと権左エ門の眼 双に赤きは

尚褐玻璃の老眼鏡をかけたるごとく

立って宰領するこの家のあるじ

熊氏の面はひげに充てり

櫓のけむりは稲いちめんひろがり

雨は拾々青き穂並にうち注げり

われはさながらわれにもあらず

稲の品種をもの云へば

或ひはペルシャにあるこゝちなり

この感じ多く耐えざる

背椎の労作の后に來り

しばしば数日の病を約す

げにかしこにはいくたび

赤き砂利をになひける

面むくみし弱き子の

人人の背后なる板の間に座して

素麵をこそ食めるなる

その赤砂利を盛れる土橋は

檜また桧の暗き林を負ひて

ひとしく雨に打たれたれど

ほだのけむりははやもそこに這へるなり

大意

ひとびとは酸っぱい胡瓜を噛み

少し濁った黄色の酒を



舞台となった弥助橋

陶の小盃に注いでは猷酬を繰り返している
その酒は今日の賦役に出てこなかった家々から
権左エ門が集め来たものなのだ
誠に権左エ門の眼の両眼ともに赤いのは
まるで褐色の老眼鏡をかけたようである
立ってあれこれ指図しているこの家のあるじの
熊氏の顔はひげ面だ
櫓のけむりは稲いちめんひろがり
雨は休みなく青い穂並に降り続けている
私はまるで私自身ではないよう
稲の品種名などを口に出すのだが
身はペルシャにでもいるように現実感がなく
この感じがするの
脊椎に負担がかかる労働の後にくるもので
数日間は寝込まなくてはならないことになりそうだ
たしかにあそこには何度も
赤い砂利を抱えていた
面のむくんだ体の弱そうな子がいて
人々の後ろにある板の間に座って
素麺を食べているところである
赤砂利を盛って作った土橋は

櫓や桧の暗い林を背負って
少年と一緒に雨に打たれているが
櫓の煙は早くもそこに這うようにやってきている

モチーフ

農村に入ってまだ間もない頃に書いたものが元になっている
ようだが、当初は農民たちの世界に批判的な内容が、文語詩で
は「われ」の病的な感覚をクローズアップし、そこから同じ労働
をした「面むくみし弱き子」への同情・共感に向かっている
ように読み取れる。この後、推敲を続けていたら、賢治は「われ」
の影を薄くしていったと思われるが、憂鬱な酒席での感情
を「弱き子」に託して書き直したかもしれない。

語注

賦役 「ふ(ぶ)えき」、「ふ(ぶ)やく」とさまさまに読む場合
があり、読み方は特定しにくい。「二百篇」に「賦役」と題され
る文語詩があり、その解説として中村稔(鑑賞『日本の詩歌18
新訂版 宮沢賢治』中央公論社 昭和五十四年九月)は「賦役とは
本来は公に収める調租と公に使役される労働とをいうが、ここで
は小作農民が地主に命じられてする強制労働を意味するであろ
う」とし、佐藤通雅(『二冊の手帳』『宮沢賢治 東北砕石工場技
師論』洋々社 平成十二年二月)は、「農民が地主にたいして労働

ではらう地代、すなわち労働地代のことだ」とする。ただ、ここは伊藤博美（後掲）が書くように「ここでの賦役は、農民の払う労働地代のことではなく、村の共同労役のことである。個人の所有する橋ではないし、小作地専用の橋でもないからである」とあるのに従いたい。舞台は賢治が独居した下根子桜の弥助橋で、「弥助橋跡」の標柱には「この辺りには当時、地元の人たちが「カツパ沢」と呼んでいた広く深い沢があり、沢には弥助橋という土橋が架かっていました。橋のかけ替え工事の際は、地元住民らが労力奉仕するのが常で、賢治も生家の山林から木を切り出して提供し、進んで作業に参加しました。作業が終わった後の野宴に参加した賢治は、そのときの情景を詩に詠んでいます」と書かれ、「ひとびと酸き胡瓜を噛み」の一節が引用されている。

権左工門 伊藤（後掲）によれば、下書稿には「権右工門」とあることから、伊藤の父の権右衛門であろうという。

熊氏 伊藤（後掲）によれば、羅須地人協会の近所に住んでおり、楽団で第一ヴァイオリンを担当するなどしていた伊藤克己の父・伊藤熊蔵のことだという。口語詩「憎むべき「隈」辨当を食ふ」のモデルであり、「五十篇」の「秘事念仏の大師匠」（二）のモデルともなった人物である。「隈」とあるのは、伊藤によれば、賢治の弟・清六が「あまりにもあからさまなので……。いろいろ差し障りもあるので、スミともクマとも読めるようにかえてお

ぎあんした」と語ったという。ただ、賢治が秘事念仏の一派に疎まれており、賢治も彼らを嫌っていたのは事実だが、伊藤熊蔵が秘事念仏の大師匠だったわけではなく、推敲の過程で改変されたことがわかっている（「秘事念仏の大師匠」（二）『五十篇評釈』）。また、『新校本全集13（上）覚書・手帳 本文篇』の「手帳断片A」には、昭和二年一月五日の記事として「伊藤熊蔵氏全竹蔵氏等来訪 中野新佐久氏来訪」とあるという。

背椎 「脊椎」のことであろうが、誤って「背」と書いているのだろう。脊椎にも影響を与えるような重労働をした、と書きたかったのだと思われる。ただ「背椎の労作の后に來り」という句は、次連の「人人の背、后なる板の間に座して」という句と、「背」「后」の二文字が共通して用いられている。「背」も「后」も、必ずしも頻繁に使う文字ではない。賢治が敢えて誤字を書いた可能性もあるように思う。馬鹿馬鹿しいことに思われるかもしれないが、賢治は「五十篇」と「一百篇」にまたがって、それぞれ「対」になるような詩を配するなど、文学的な効果があるとも思われないうような、ゲン担ぎか、まじないのような試みをしている（「五十篇」と「一百篇」賢治は「一百篇」を七日で書いたか『一百篇評釈』）。そんなことも考えておいてよいかもしれない。

評釈

黄野詩稿用紙(24 24)に口語詩「七三五 饗宴 一九二六、九、三、」が書かれ、その裏面に、書き直しである口語詩「みんなは酸っぱい胡瓜を噛んで」下書稿(一)が書かれ、その行間に鉛筆で書きこまれたものが下書稿。現存稿は一種のみ。

まず、先行作品である口語詩「みんなは酸っぱい胡瓜を噛んで」の、さらに前の形態である「春と修羅 第三集」の「七三五 饗宴」から見てみたい。

酸っぱい胡瓜をぼくぼく噛んで

みんなは酒を飲んでゐる

……土橋は曇りの午前にできて

いまうら青い楳のけむりは

稲いちめんに這ひかゝり

そのせきぶちの杉や檜には

雨がどしやどしや注いでゐる……

みんなは地主や賦役に出ない人たちから

集めた酒を飲んでゐる

……われにもあらず

ぼんやり稲の種類を云ふ

こゝは天山北路であるか……

さつき十べん

あの赤砂利をかつがせられた

顔のむくんだ弱さうな子が

みんなのうしろの板の間で

座つて素麵をたべてゐる

(紫雲英植れば米とれるてが

藁ばりとつたて間に合あなじや)

こどもはむぎを食ふのをやめて

ちらつとこつちをぬすみみる

農村に入つて半年ほどたった頃、賢治は共同作業で土橋の修理に駆り出され、赤砂利を運んだあと、地主や仕事に参加しなかった人たちからのお礼・お詫びとして出された黄色い酒を飲み交わしている際の心情を描いている。賢治が稲の名を口にし、また、紫雲英を蒔いておくと、大気中の窒素を取り込んでよい肥料になるのだということを説いても、まともに取り合つてもらえない悔しさが描かれている。浜垣誠司(「「饗宴」詩碑」<http://www.ihatov.cc/monument/135.htm>)によれば、「賢治が盛岡高等農林学校卒業後に肥料学の講師となり、後に教授となつた小野寺伊勢之助博士のことを、東北砕石工場時代の賢治は「紫雲英栽培の権威」として鈴木東蔵に紹介しています。レンゲを田に植えておくと、その根にある根瘤バクテリアの作用によって空中窒素を固定して窒素化合物として土壌の養分にできるため、作物の収量が上がるの

です。／＼このようなことを農芸化学的にも理解していた賢治は、近隣の農民のためを思つてレンゲ栽培を勧めてみたのでしようが、彼のその善意は、侮蔑的な冷笑を誘つただけでした」としている。

賢治と同じように、あまり強そうには思えない体ながら、十回ばかりも「赤砂利をかつがせられた」少年に目をやるが、その子も賢治のことをどこか訝しんでいるようで、まったく居心地の悪さだけが残る経験だったようだ。

次いで口語詩「みんなは酸っぱい胡瓜を噛んで」（作品番号と日付を取つて改作されていることから「第三集補遺」として『新校本全集』に収録されている）の下書稿(二)を見てみたい。

みんなは酸っぱい胡瓜を噛んで

賦役に出ない家々から

集めた酒をのんでゐる

中で権左工門の眼は

眼がねをかけたやうに両方あかく

立つて宰領する熊氏の顔はひげ一杯だ

槽のけむりは稲いちめんひろがって

雨はどしどしその青い穂に注いでゐる

おれはぼんやり稲の種類を答へてゐる

さつき何べんも何べんも

あの赤砂利をかつがせられた

顔のむくんだ弱さうな子は

みんなのうしろの板の間に

座つて素麵むぎをたべてゐる

その赤砂利を盛つた新らしい土橋は

檜や杉の暗い陰気な林をしょつて

やっぱり雨に打たれてゐる

ほだのけむりがそこまで青く這つてゐる

大きな改変としては「(紫雲英植れば米とれるてが／藁ざりとつたて間に合あなじや)」という、賢治と農民との立場や考え方の違いが露骨に出た一文が消えていることだろう。また、「こどもはむぎを食ふのをやめて／ちらつとこつちをぬすみみる」も消えている。町の人間である賢治と子どもも含めた村の人間の違いがあまり鮮明にならないように改変されている。

「七三五 饗宴」は、原稿用紙の隅に10のスタンプが押された、いわゆる10番稿で、「この篇みな／疲労時及病中の／心こゝになき手記なり／発表すべからず」とメモ書きされたところの詩篇の一つだとされておられ、それも影響していたのかもしれない(木村東吉「宮沢賢治・封印された「慢」の思想 遺稿整理時番号10番の詩稿を中心に」『国文学攷176・177』広島大

学国語国文学会 平成十五年三月)。

同じ紙面で文語詩化が始まるのだが、時間的な差がどれくらいあったかはわからない。ただ、全く新しく付け加えられた部分があり、そこには賢治自身を示すと思われる「われ」に関わる記述がある。

われはさながらわれにもあらず

稲の品種をもの云へば

或ひはペルシャにあるこゝちなり

この感じ多く耐えざる

背椎の労作の后に來り

しばし数日の病を約す

口語詩「みんなは酸っぱい胡瓜を噛んで」では、「おれはぼんやり稲の種類を答へ」ただけだし、先行形態である「七三五 饗宴」でも、「われにもあらず／ぼんやり稲の種類を云ふ／こゝは天山路であるか」とあるのみで、浜垣(前掲)は「七三五 饗宴」について、「この宴会における賢治はまるで異世界に迷い込んだような気持ちにとらわれ、「こゝは天山路であるか…」などと呆然と考えています」と書いている。

しかし「われ」がぼんやりしてしまったのは、文語詩を読む限り、疲労によって発した離人症や現実感の喪失であったと思

われる。事実、「MSDマニュアル」(<https://www.msmanuals.com/>)によれば、「強い疲労」によってそうした状況になるものようだが、ともあれ重要なのは科学的な事実であるより、賢治がそう信じていたということだ。

賢治の離人感・現実感の喪失は、大正十年八月十一日の関徳弥宛書簡でも書かれていた。

七月の始め頃から二十五日へかけて一寸肉食をしたのです。それは第一は私の感情があまり冬のやうな工合になつてしまつて燃えるやうな生理的の衝動なんか感じないやうに思はれたので、こんな事では一人の心をも理解し兼ねると思つて断然幾片かの豚の脂、塩鱈の干物などを食べた為にそれきつかけにして脚が悪くなつたのでした。然るに肉食をして別段感情が変わるわけでもありません。今はもうすっかり逆戻りをしました。

「感情があまりに冬のやうな工合にな」つてしまうことについて、賢治は肉食をしないためだと考えていたようだが、ここで「ペルシャにあるこゝち」になつてしまつたのは、労働のためである、と、自分で診断した結果であろう。

つまり、賢治は口語詩を改稿する段階で町と村との価値観の違いや、それによる感情のもつれを目立たせないように改稿し、

文語詩化にあたっては、「われ」の一種病的な感覚をクローズアップしようとしたということになる。

そして、その「われ」の目に映ったのが、「さつき何べんも何べんも／あの赤砂利をかつがせられた／顔のむくんだ弱さうな子」であった、と展開される。先に見たように、初期の「七三五 饗宴」の段階で、この子は賢治を怪しい存在であるとして、賢治を盗み見る存在であった。

(紫雲英植れば米とれるてが

藁ばりとつたて間に合あなじや)

こどもはむぎを食ふのをやめて
ちらつとこつちをぬすみみる

しかし、労働によつて賢治が現実感を喪失するのと同じように、賢治はこの子も現実感を失つて、ぼんやりしているのだと書かれるようになる(実際にそうであったのかもしれないが)。

赤き砂利をになひける

面むくみし弱き子の

人人の背后なる板の間に座して

素麵をこそ食めるなる

「七三五 饗宴」で、賢治は農民たちによる自分への冷淡な仕打ちに怒り、また悲しみ、農民の子供にも疑いの目を向けられる自分の孤立感を描いていた。しかし、文語詩の制作段階になると、ともに厳しい農作業に疲れ、酒など興味を持てず、ぼんやりとしてしまっているという意味で同じ存在である「面むくみし弱き子」を見出し、自分に近い存在として描く気になったようである。

ところで文語詩は、推敲が進んでいくと、賢治は自伝性を排除し、「われ」といった言葉を減らすだけでなく、自分自身の視点を消し、自分の姿も文語詩に留めないように改稿していく傾向が指摘される。だとしたら本作は、この後、どちらの方向に推敲を進められていただろう。

「五十篇」の「〔夜をま青き藺むしろに〕」は、賢治が師である関豊太郎と早池峰山のふもとの大迫で酒の席に臨んだ際の詩だ。下書稿(一)は「土性調査慰勞宴」というタイトルを付された次のような作品だ。

酔ひて博士のむづかしく

慶応出でし町長も

たゞさりげなくあしらへば

縮れし髪を油もて

うち堅めたるをみな子も

なすべきさがを知らぬらし

面をひそめて案ずるは

接待役の郡の枝手

ことあたらしくうちしける

青き藺草の氈の上に

人人のかげさゆらげば

昨日も今日もめぐり来し

たばこばたけのおもひあり

また人人の膳ごとに

黄なる衣につままれて

三尾添へたる小魚は

昨日も今日もたどり来し

くるみ覆へるかの川の

中に生れたる小魚なれ

村長われが前に居て

わが酒吞まず得酔はねば

西瓜を喰めとすむるは

組合村の長なれや

あゝこのま夏山峡の

白き銀河の下にして

天井低きこの家に

つどへる人ぞあはれなれ

酒を飲む男たちの醜態。賢治も飲みたくもない酒を勧められ、飲まないとなればスイカを食べると勧められ、この酒宴に辟易としている。

推敲の過程で、賢治はこの憂鬱な宴席にいた自分の影をだんだん消していく。そして、やはりこの宴席を楽しいものだとは思っていなかっただろう酌婦の「をみな子」に自らの憂鬱な心情を託し、文語詩を定稿化している。

①夜をま青き藺むしろに、 ひとびとの影さゆらげば、
遠き山ばた谷のはた、 たばこのうねの想ひあり。

②夏のうたげにはべる身の、 声をちぢれの髪をはぢ、
南かたぶく天の川、 ひとりたよりとすかし見る。

天沢退二郎（「声」の出所をめぐって）『宮沢賢治鑑』
筑摩書房昭和六十一年九月は、賢治自身の視点から「をみな子」

の視点に変わっていることを、「《宮沢賢治》なる第一のせまい奥のさらに向こうの、第一の広い奥において、ひとりの《歌妓》に一瞬変転し、照応したのだとは言えないだろうか」と書いていた。

推測にしか過ぎないが、本作でも、賢治は憂鬱な宴席で、ともに苦痛を感じる「子ども」を見つけ、その同志に託して本作をまとめるつもりがあったのではないだろうか。

そして、さらに想像をたくましくすれば、こうした作品を「五十篇」の「「夜をま青き藪むしろに」」で、すでに書いてしまったため、賢治は本作を定稿とすることを辞めてしまったのかもしれない。

先行研究

伊藤博美 「「饗宴」の舞台」 (『賢治研究42』宮沢賢治研究会 昭和六十二年一月)

信時哲郎 「賦役」 (『二百篇評釈』)

3 「こんにやくの」

こんにやくの
す枯れの茎をとらんとて
水こぼこぼと鳴る

ひぐれまぢかの笹はらを
兄弟二人わけ行きにけり

大意

コンニャクイモの
末枯れた茎をとろうとして
水がこぼこぼと鳴る
日暮れ間近の笹原に
兄弟二人が分け行っていた

モチーフ

「〔冬のスケッチ〕」に書かれた詩篇を文語詩化したもの。「しみじみとひとりわけ行けり」とあったものが、文語詩では「兄弟二人わけ行きにけり」に改変されている。文語詩において「兄弟」の語が使われているのは本作と「二百篇」の「〔枯草の雪とけたれば〕」「しかないが、〔枯草の雪とけたれば〕」には「兄弟の馬喰」という句がある。やはり「〔冬のスケッチ〕」に出発点があることから、イメージに連続するところがあったのかもしれない。とすれば「〔枯草の雪とけたれば〕」が、一時「人民の敵」と題されたこともあることから、本作にも、なにか人民の敵めいたイメージが付与されていた可能性がある。農作業が終わる「ひぐれまぢか」に、兄弟でコンニャクイモを奪

い取ろうとする小悪漢を詠んだものと取ってみたい。

語注

「こんにやく 東南アジアを原産とするサトイモ科の多年草。一mほどの葉を一枚(ただし何枚の葉が茂っているように見える)伸ばし、大きな球茎を食用、薬用、また工業用に用いる。食用とするのはミャンマーと中国の一部、日本のみだという。秋になって葉が枯れると新イモの成長が止まり、収穫期となる。「こんにやくの／＼枯れの茎をとらんと」したのは、まさにコンニャクを収穫するためだろう。当時、農家の副業のためにコンニャク栽培が奨励され、「有利なる副業として第一に挙げたいのは蒟蒻栽培である」(高田功「総説」『最も利益ある蒟蒻と其栽培法』新農報社 大正十二年八月)とも言う。

「こぼこぼ 水が湧き出る音。『二百篇評釈』の「病技師」や「ひかりものすとうなるごが」の評釈では、先行研究を受けながら、胸を病んだ賢治が肺のラッセル音をイメージしながら書いたとした。事実、「二百篇」の「病技師(一)」に「蝕む胸をまぎらひて、こぼと鳴り行く水のはた」、また、同じ「二百篇」の「ひかりものすとうなるごが」にも「こなまぶれしそのあるじ、／＼にはかに咳し身を折りて、水こぼこぼとながれたる」とあり、どちらも肺を患った人のイ

メージがある。しかし、賢治は「こぼこぼ」という水の音を、いつも病的なイメージで使っているわけではなく、「春と修羅第二集」の「一九五塚と風 一九二四、九、一〇」に「呟くやうな水のこぼこぼ鳴るやうな」とあり、また「補遺詩篇四」の「雲影滑れる山のこなた」でも「谷の水屋絶えずこぼこぼと鳴れるは」といった句があった。本作にも必ずしも肺病のイメージを読み取らなくてよいように思う。

評釈

「(冬のスケッチ)」の第二四葉を手入れした下書稿(一)、口語詩「一〇七六 嚙語 一九二七、六、一三」と、それを文語詩化した「一〇七六 病中幻想一九二七、六、一三」(「未定稿」)が書かれた赤野詩稿用紙の裏面に書かれた下書稿(二)の二種が現存。紙面の右肩に①の文字があるが、同じ紙面に書かれた「二百篇」の「林館開業」の付されたものなのかどうか判断が難しい。

まず先行作品である「(冬のスケッチ)」の第二四葉から見ていきたい。

水こぼこぼと鳴る
ひぐれまぢかの笹やぶを、
しみじみとひとりわけ行けり。

そのあとは「隔離舎のうしろの杉の脚から／西のそらが黄にひかる」とあることから、舞台は隔離舎が近くにあった稗貫農学校の近辺だと思われる。また、続けて「雪融けの洪水から 杉は／みんな泥をかぶった」ともある。どういう感情が込められているのか、また、どういう景色を描きたかったのか判然としないが、「ひとり」で、「雪融けの洪水」の「泥」にまみれていることから、あまり楽しそうでないことはわかる。

下書稿(一)への改変過程をみていこう。まず鉛筆による書入れで三行目の「しみじみと」を削除してから、赤インクで次のように書き換える。

こんにやくのす枯れの茎をとらんとて

水こぼこぼと鳴る

ひぐれまぢかの笹やぶを、

兄弟二人わけ行けり。

コンニヤクという具体的な作物の名前を付け加えているが、副業のために栽培を奨励されることの多い作物であるものの、南方が原産であることから、岩手県は最適の地とは言いにくい。音数や音韻から選ばれた可能性もあるが、「二百篇」の「母」には「朝の曇りのこんにやくを、 さくさくさくと切りにけり」

とあったことも思い出される。

「す枯れの茎をと」という句から、枯れてしまったコンニヤクを片付けているのだと思われそうだが、「収穫は降霜後茎倒潰したる後とす 茨城、福島地方にては十月中下旬より十一月頃とす」（御代専蔵「収穫」『蒟蒻栽培と種実繁殖秘伝』大日本蒟蒻栽培奨励会 大正十四年四月）とあるとおりだ。「冬のスケッチ」では先行作品と同じ紙葉に「雪融けの洪水」とあって、原体験は春先とも思えるし、また、下書稿の手入れでは、「病み」「す枯れたる」という段階もあったが、下書稿(一)や下書稿(二)に、類似したイメージがないことから、コンニヤクの収穫として捉えておきたい。

そこで気になるのは、「しみじみとひとり」で笹やぶに入っていたとあったのが、「兄弟二人」が分け入るように改変されていることだ。

「五十篇」の「[月のほのほをかたむけて]」で、賢治は夜中の山村の家の軒下で仮眠を取ろうとしたところ、家の人を起こしてしまったら、馬泥棒と間違われるのではないかという思いが増し、結局、文語詩では視点人物を虚構化し、盗賊に置き替えて定稿とした例がある。

そのアイディアを踏襲すれば、「ひぐれまぢか」という、そろそろ農夫たちが農作業をやめて帰路に就くという時刻に「しみじみとひとりわれ」が笹やぶに入っていくことから、こんに

やく泥棒を思いついた可能性もあるのではないだろうか。「春と修羅 第二集」の「七四三 盗まれた白菜の根へ」一九二六、一〇、一三、」では、自分が畑から白菜を盗まれた時の悔しい思いを綴ってもいたので、実際、そうした輩も少なからずいたのであろう。

そして「兄弟二人」である。兄弟といえ、賢治を慕っていた弟・清六のイメージも浮かぶかもしれないし、また童話「ひかりの素足」における一郎と櫛夫の兄弟を思い浮かべるかもしれない。近藤晴彦（後掲）は、「幼年期の郷愁」を読み込んでいるが、「二百篇」の「枯草の雪とけたれば」における「兄弟の馬喰」というイメージも思い起こしてよいだろう。この兄弟は、文語詩の中で、何の悪事を行ったわけでもない。雪解け水の流れる壮大な光景を恍惚として眺めていただけなのだが、同詩の下書段階では「人民の敵」というタイトル案があった。馬喰とは、馬の商いをする存在だとニュートラルに受け止められるより、農民にうまい言葉をかけては不当な利益をむさぼるというマイナスのイメージで受け取られることの多い語であった。同詩の中に、三百（代言）も登場するが、法律の専門家である弁護士と言うより、うまいことを言っつては、人を騙す存在というニュアンスの漂う語で、賢治は「陰気の狼」とあだなをもてる」としていた。

「ひぐれまぢか」の笹やぶに兄弟で分け入っていくというの

は、熱心な農夫の兄弟を描いたのだと受け取れないことはない。「す枯れの茎」や「こぼこぼと鳴る」水にも、勇壮さよりも、みじめさ、あわれさが漂うように感じられ、だからこそ農村の悲惨さと、その中で生きる英雄を書こうとしたと解することもできよう。イメージだけから、勝手に彼等を悪人と決めつけるのは、いかななものか、とも思う。

しかし、賢治は妹クニに文語詩を朗読して「聞いて、思い浮かぶ情景を言ってくれ」と語り、クニが「思いつくままに何やかや言」つたことを参考にして推敲していたという（『編集室から』「校本宮澤賢治全集 第五巻 月報」筑摩書房 昭和四十九年六月）。つまり当時の岩手県で生きた人々の「思いつくまま」のイメージを重視していたとすべきだろう。それゆえ時には馬喰や代言に対する偏見を助長したり、月並みなイメージを使うことにもなつたかもしれない。しかし賢治は、そうした大衆性と芸術性の両方が表現できるギリギリの場所に文語詩を置き、「なつても駄目でも、これがあるもや」と言っただのではないかと思うのである。

先行研究

近藤晴彦「死の視点Ⅱ」（『宮沢賢治への接近』河出書房新社 平成十三年十月）

4 開墾地 「断片」

〔断片一〕

焦ぎ木のむらはなほあれば

山の畑の雪消えて〔以下なし〕

〔断片二〕

青年団が総出にて

しだれ桜を截りしなり

大意

焦げ木にむらがあれば

山の畑の雪は消えて

青年団が総出で

しだれ桜を切ったのである

モチーフ

「二百篇」の「開墾地落上」制作過程で断片化した詩篇だろう。

山間の村が開墾を祝っている場に賢治も臨席したようだが、農

民たちの生活の改善には到底つながらないことを見抜いていたようだ。

語注

焦ぎ木 関連作品である「二百篇」所収の「開墾地落上」では

「焦げ木」とある。間違いか、意図的なものかはわからない。

評釈

口語詩「二〇五九 開墾地検察 一九二七、五、九」の書かれた赤野詩稿用紙の裏面に書かれた下書稿(タイトルは「開墾地」)のみ現存。『新校本全集』には「本稿は、その文語詩化の試みの断片と目されるものである」とある。『一百篇評釈』の「開墾地落上」にも書いたごとく、同作品の関連作品だろう。

断片であることから全体像は把握しにくく、先行作品である「二〇五九 開墾地検察」から考察するとなると、『一百篇評釈』の「開墾地落上」で書いた内容と限りなく近くなるを得ない。同書を刊行してから、まだあまり時間も経っていないことから、新しい発見も特にないため、ほぼ同じ内容を重ねて書くことをお許しいただきたい。

ともあれ、「二〇五九 開墾地検察」から見えていくこととしたい。

……墓地がすっかり変ったなあ……
……なあにそれすっかり整理したもんでがす……
……ここに巨きなしだれ桜があったがねえ……
……なあにそれ
青年団総出でやったもんでがす
観音さんも潰されあした……
……としよりたちが負けたんだねえ……
……なあに総一あたった一人できかなくなつて
それでだ誰つても負げるんでがんす……
……苗圃のあともずるぶんひどく荒れたねえ……
……なあにそれ
お上でうんと肥料したづんで
これで六年無肥料でがす……
……あちこち茶いろにぶちだしてゐる……
……はあ、
苹果の枝 兎に食はれあした
桜んぼの方は食ひあせんで
桃もやっぱり食はれあした……
……兎はとらなけあいけないよ
それでも兎の食はない種類といふんなら
花には薔薇につつじかな
果樹ではやっぱり梅だらう……

……桜んぼの方は食ひませんで
苹果と桃をたべたので……
……そらそら
その苹果の樹の幽霊だらう
その谷そこに突つたつて
いっぱい花をつけてるやつは……
……はあ……
……針金製の鉄索か
この崖下で切り出すんだな……
……はあ 鉛の丸五の仕事でがあす……
……そんなにこれが売れるかねえ……
……はあ
耐火性だつて云つて売ってます……
……耐火性さなこの石は
あれだな開墾地は……
……はあ
上流の橋渡つて参りあす……
そして、それが定稿化されたと思われる「二百篇」の「開墾
地落上」は次のような作品だ。
①白髪かざして高清は、 ブロージットと云へるなり。

②松の岩頭 春の雲、 コップに小さく映るなり。

③ゲメンゲラーゲさながらを、 焦げ木はかつとにほふなり。

④額を拍ちて高きは、 また鶯を聴けるなり。

「詩ノート」によれば、一九二七（昭和二）年五月九日に、賢治は六つの詩篇を残しており、小沢俊郎（「二七・五・九の作品」「四次元142」宮沢賢治研究会 昭和三十七年十月）は、「宮沢賢治詩中の第一級ではないだろうが、賢治的特色の豊かな作」だとしている。当時の湯口村（現・花巻市湯口、鈴、鍋倉などを含む）の村長だった阿部晁と思われる「村長」（「一〇五八 電車 一九二七、五、九、」）と共に、賢治は花巻電車に乗って湯口村内の開墾を記念する祝賀会に行ったようだが、その時に阿部（作中では高は）が乾杯の音頭（ブロージツト）を取った様子を文語化したのであろう。山間の村で、鶯が鳴く中を、ブロージツトやゲメンゲラーゲといったドイツ語を用いて、さわやかな、しかし、濁音が多く勇ましいドイツ語の音韻に、焦げ木の匂い、祝賀会の賑わいを重ね、どこかユーモアを漂わせた作品となっている。

しかし、「詩ノート」に同日の作品として収められた「一〇

六三「これらは素樸なアイヌ風の木柵です」 五、九、」では次のように書いている。

斯ういふ角だった石ころだらけの
いっばいにすぎなやよもぎの生えてしまった畑を
子供を生みながらまた前の子供のぼろ着物を綴り合せながら

また炊爨と村の義理首尾とをしながら
一家のあらゆる不満や欲望を負ひながら

わづかに粗澁な食と年中六時間の睡りをとりながら

これらの黒いかつぎした女の人たちが耕するのであります

この人たちはまた

ちやうど二円代の肥料のかはりに

あんな笹山を一反歩ほど切りひらくのであります

そして

ここでは蕎麦が二斗まいて四斗とれます

この人たちはいったい

牢獄につながれたたくさんの革命家や

不遇に了へた多くの芸術家

これら近代的な英雄たちに

果して比肩し得ぬものでございませうか

賢治は村の人たちの労働を労い、讚美するが、一方で、この程度の開墾で、彼らの生活が劇的に変化しないことを見抜いていたようだ。島田隆輔（「原詩集の輪郭」）、「宮沢賢治 文語詩稿の成立」が『岩手県農業史』（岩手県 昭和五十四年一月）を引用しながら書くように、開墾は大正十一年から活発になり、昭和三年に激増。岩手県では岩手、紫波、稗貫、和賀の各郡でさかんであったという。同じ頃には、農村を支えるべく副業も奨励されており、賢治は「二百篇」の「副業」で文語化していたが、賢治は「巨利」を得ようとする「のらくらもの」と囁かれる青年の姿を書いており、それが岩手の農村を抜本的に救うものではなかったことを描いている。

ただ、「詩ノート」の「二〇六二」墓地をすっかり square にして「五、九、」には次のようにも書かれている。

日あたりの荒い岩かどを

巡礼のこゝろもちで

つゝましく

西の温泉から帰ってくる

百姓の家族たち

社会から疎外され、搾取されているはずの「百姓の家族たち」が、楽しそうに温泉から帰ってきているのである。現実を目を

向けよ、と言った所で、自分にどうできるわけでもない。むしろ、その時々の小さな幸せを十二分に味わう人生の方が有意義ではないのか：ほろ苦いながらも、農村の小さな幸せである開墾地の落上（正しくは落成か？）を、今は祝ってやるべきだという詩であったのかもしれない。

先行研究

信時哲郎「開墾地落上」（『二百篇評釈』）

5 「し の め 春 の 鴉 の 火 を」

し の め 春 の 鴉 の 火 を

アルペン農の汗に燃し

縄と菩提樹皮にうちよそひ

風とひかりにちかひせり

四月は風のかぐはしく

雲かけ原を超えくれば

雪解けの 草をわたる

黒^{メラフアイター}玢岩の高原に

生し の め の 火 を 燃 せ り

島わの遠き潮騒えを

森のうつゝのなかに聴き、

羊歯のしげみの奥に

青き椿の実をとりぬ、

黒潮の香のくるはしく

東風にいぶきを吹き寄れば

百千鳥すだきいづる

三原の山に燃ゆる火の

なかばは雲に鎖とくされぬ

大意

春の夜明け頃、トキ色の火がつけられたように見える空は

高原の農夫たちの汗を赤く燃やし

縄と菩提樹の皮で作ったケラで装われているが

風と光にむかって誓い合っている

四月の風はかぐわしく

雲かげが草原を越えて吹いてくると

雪解けあとの草をわたってやってくる

黒玢岩でできた高原が

朝まだきに火をつけたように見えている

島の曲がりくねったあたりに遠く聞こえる潮騒を

森の中で聞き取り

シダの茂みの奥で

青い椿の実を取った

黒潮の香りはものぐるおしく

東風から生命の息吹を吹きかけられると

百千の鳥たちが鳴きだした

三原山の噴煙は

その半分は雲に鎖とくされてしまう

モチーフ

「二百篇」所収の「種山ヶ原」の関連作品。ドヴォルザークの交響曲第九番「新世界より」の二楽章にあわせて歌わせようとしたのだろう。昭和三年六月、賢治は伊豆・大島に農芸学校を開設しようとしていた伊藤七雄を訪ねたが、「種山ヶ原」が岩手の農民や花巻農学校の生徒に歌われることを望んでいたように、この歌を大島の農民や農芸学校の生徒に歌わせるつもりだったのだろう。大正後期から昭和初期にかけて新民謡がブームとなっていたが、賢治が大島を訪ねた頃、新民謡の代表的作品である「波浮の港」のレコードが売れ行きを伸ばしていた。本作に「波浮の港」の影響があるとは考えにくいだが、新しく民謡を作ることの流行と、新しい土地にあわせた詩（歌詞）を作ろうとする賢治には似た部分もあったように思う。

語注

アルペン農 アルペンはドイツ語でアルプス山脈のこと。大島の農芸学校があったあたりは標高二十五メートルほどでアルペンとはいいがたい。関連作品である「『百篇』の「種山ヶ原」の文字が削除されないままであったようだ。『新校本全集』で本文として採用している下書稿(三)は書き換え途中のものと考えられ、この後に書いたと考えられる『新校本全集6』所収の「『島わにあらき潮騒を』」には、この件りがない。

菩提樹皮 ボダイジュ(和名ではシナノキ)の皮のこと。ここでも書き換え途中にあるために残っているのだろう。「『百篇』」では菩提樹にマダカのルビがある。

黒玢岩 メラファイアー これも書き換え中のために残った語だろう。賢治は「歌稿〔A〕」の601で「目のあたり黒くもありと覚えしは黒玢岩メラファイアーの立てるなりけり」、また「歌稿〔B〕」の601では「目のあたり／黒雲立つとまがひしは／黒玢岩メラファイアーの露頭なりけり」と詠んでいるが、「種山ヶ原七首」のタイトルからも、種山をイメージしているのだろう。黒玢岩は『原色日本岩石図譜』(松邑三松堂 昭和十二年十二月)によれば「主成分。橄欖石、輝石、斜長石(亜灰長石―灰長石)、ときに玄武岩角閃石。／噴出岩及び脈岩。橄欖石の結晶の巨大なものを含

む事が多い。石基は黒色が最も普通である」とある。ちなみに鈴木健司(後掲)によれば、賢治は種山の地質についてさまざまに書いており、「賢治にとつて種山ヶ原<の岩石認識は、黒玢岩メラファイアーであり、蛇紋岩であり、時には閃緑玢岩である、という地学的には理解することの不能なきわめて特異な場所であった、ということになる。また、私の調査では、種山ヶ原<頂上の残丘を成す岩石は、それらのどれでもない、あずき色や緑色がかつた凝灰岩の硬い塊であった」という。

評釈

「歌稿〔B〕」の601、602、603^aが「原体剣舞連」(『春と修羅(第一集)』)の一部に用いられ、文語詩化されて「『百篇』の「種山ヶ原」となっており、アイデアや語彙にも関係が深い。『新校本全集』によれば、「『三原三部手帳』B」に書かれた下書稿(一)(タイトルは「◎大島開墾者の歌」)、赤野詩稿用紙に書かれた下書稿(二)(裏面には、本作と同じく伊豆大島への旅に関わる「未定稿」の「火の島(Wedder 海の少女の譜)」、赤野詩稿用紙に書かれた下書稿(三)、無野の洋紙に書かれた「『島わにあらき潮騒を』」(『新校本全集6』の「補遺詩篇II」に収録)の四種が現存。

文語詩「種山ヶ原」は、花巻農学校時代にドヴォルザークの交響曲第九番「新世界より」の第二楽章「ラルゴ」の節で生徒たちにも歌わせたことで知られ、生徒に宛てて扇面に詞を書きつけた例もあ

り、賢治には農学校の生徒をはじめとした岩手の農村の人々に歌ってもらったつもりがあったのだと思う。

昭和三年六月、賢治は伊豆大島にわたり、この地で農芸学校を設立しようとする岩手県・水沢出身の伊藤七雄の相談に乗ったという。同郷で新しい時代の農業に熱い志を持った伊藤への思いから、農芸学校で学ぶ生徒や、大島で農業に携わる人々にこの歌を送る意志があったのだろう。

現存する最終形態の文語詩であると思われるのが「島わにあらき潮騒を」である。

島わにあらき潮騒を
うつつの森のなかに聴き
羊歯の葉しげき下蔭に
青き椿の実をとりぬ

南の風のくるほしく
波のいぶきを吹き来れば
百千鳥 すだきわぶる

三原の山に燃ゆる火の
なかばは雲に鎖されぬ

冒頭に掲げた『新校本全集』掲載の第一連が削除されて「種山ヶ原」のイメージが払拭され、「潮騒」「椿の実」「南の風」「三原の山」といった大島を思わせる語のみが用いられている。ちなみに「一百篇」の「種山ヶ原」は次のようなものだ。

春はまだきの朱雲あけを
アルペン農の汗に燃し
縄と菩提樹皮ツバキにうちよそひ
風とひかりにちかひせり

繞る八谷に劈櫛ツバキの
いしぶみしげきおのづから
種山ヶ原に燃ゆる火の
なかばは雲に鎖さるゝ

この第一連が本作にも残っていたわけだが、ただ、どちらの詩でも最終行に「なかばは雲に鎖されぬ(鎖さるゝ)」とあり、賢治は意識的に配置したようである。「五十篇」と「二百篇」について、賢治は意識的に同じタイトルを冠したり、似たフレーズや語句などを配置する例があり、それらを仮に「対」と呼んでみたが(「五十篇」と「二百篇」賢治は「二百篇」を七日で書いたか『『一百篇評釈』)、ここでも「対」のような

意識が存在していたように思う。

さて、伊藤七雄は、大島で妹・チエと同居していたようだが、彼女は賢治が「私は結婚するかも知れませんが」と語った相手だとも言われている（森荘巳池「昭和六年七月七日の日記」『宮沢賢治の肖像』津軽書房 昭和四十九年十月）。大島への二泊三日の旅を終った「三原三部」の「第一部」の最後には「：南の海の／南の海の／はげしい熱気とけむりのなかから／ひらかぬまゝにさえざえざえ芳り／つひにひらかず水にこぼれる／巨きな花の蕾がある……」とあるが、これはチエへの思いを述べたものだと思われることが多い。これから大島に渡ろうという時の詩に、チエのことを書いたというのはいさし強引すぎるように思うが、賢治が伊藤兄妹に対して親愛の情を抱いていたことは確かだ、本文語詩を解するうえでも押さえておくべきことだと思われる。

ちなみに農芸学校は昭和六年四月に開校されたが、募集人員五十人のところが入学者はわずかに七人。校長が結核患者であったことから入学をやめた者もあったとのことで、七雄は「入るものは花びらばかり 新校舎」といった句も作ったという。失意のうちに七雄は昭和六年八月に没した。

成立の舞台裏を追ってきたが、気になるのは昭和三年に「波浮の港」（詞・野口雨情、曲・中山晋平）のレコードが発売されたことだ。波浮港は大島の南部にあり、旧火口がそのまま港

となった天然の良港で、雨情は現地に行ったこともないのに詩を作って大正十三年六月に「婦人世界」に掲載。昭和三年五月には中山晋平による曲が付けられ、佐藤千夜子がレコードを発売したところ「数カ月で一〇万枚も売れるというヒット」（菊池清磨「歌謡曲が美しかった時代」『日本流行歌変遷史』論創社 平成二十年四月）を記録し、同年七月には藤原義江もレコードを出している。

賢治は、ちょうどその渦中ともいえるべき昭和三年六月十二日に大島に来ているので、賢治の頭には、おそらく「波浮の港」があっただろう。ただ、賢治は十二日に元町港に着いた後、その北にある伊藤の自宅（元村字野地六五五番地）を訪ね、そこで二泊しているようなので、元町港から南東に十数キロ離れた波浮港は、おそらく訪ねていない。

「波浮の港」（『波浮の港』ビクター出版社 昭和四年十月）をあげてみる。

磯の鵜の鳥ヤ

日暮れに帰る

波浮の港にや

夕焼け小焼け

明日あすの日和は

ヤレ ホンニサ 凧あするやら

船もせかれりや

出船の支度

島の娘達ヤ

御神火ごじんくわ暮し

なじよな心で

ヤレ ホンニサ ゐるのやら

島で暮らすにや

とぼしうてならぬ

伊豆の伊東とは

郵便だより

下田港とは

ヤレ ホンニサ 凧あすだより。

凧あすはしほかせ

御神火おろし

島の娘達ヤ

出船のときにや

船の ともづな

ヤレ ホンニサ 泣いて解く。

生活の苦しい漁村の「歌ひめ」が、客を送り出す時には涙で別れるというのは、男性視点のご都合主義的な歌詞にも思えるが、文語詩定稿で「歌ひめ」の境遇を描いていた賢治には、案外すつきり呑み込めたかもしれない。もちろん「波浮の港」の影響が、賢治の文語詩や「しこのめ春の鶉の火を」に、直接現れているとは考えにくい。ただ、下書稿(一)が書いてあった「三原三部手帳」Bに「◎大島の少女の歌」(本文はなく、タイトルのみ)と書き残していることは注意すべきだろう。「大島の少女」が、伊藤チエを指していたとも考えられるが、チエは岩手県の水沢で生まれ育って盛岡高等女学校を卒業し、大正十三年から十五年まで東京の二葉保育園で保母として勤務。兄の七雄を看病するために休職し、大島に渡っているのだ。「大島の」というのは、あまりふさわしくない。また、明治三十八(一九〇五)年生まれということなので当時は二十二、三

歳で、「少女」というには少し無理がある。

とすれば「波浮の港」に登場するような「娘達」を念頭に置いていた可能性も考えられてよい(あるいは同じ大島を詠んだ文語詩「火の島 (Mehar 海の少女の譜)」と関連させる考えもあるかもしれないが、こちらはウエーバーの歌劇「オペロン」の曲名から来ているので、だいぶ離れているように思う)。

文語詩と流行歌では差があるように思われるかもしれないが、野口雨情は北原白秋や西條八十とともに一九二〇年代から三〇年代半ばにかけて新民謡運動で活躍していた人物である。

民謡とは、古来から土地土地で歌われ、愛されてきた音楽のように思われそうだが、明治以降、西洋音楽だけが音楽であると教育されてきた若い世代には、自分たちの感覚に合った歌がないという思いがあり、それに応えて新民謡運動が起こったとされている。「須坂小唄」(大正十四年。作詞・野口雨情、作曲・中山晋平)や「ちやつきり節」(昭和二年。作詞・北原白秋、作曲・町田嘉章)、「東京音頭」(昭和八年。作詞・西條八十、作曲・中山晋平)等は、この時期に作られたもので、今日では旧来から伝わって来た民謡以上に知名度のあるものも少なくない。

雨情や白秋には、こうした新民謡の創作のみを集めた本もあり、民謡についてのエッセイや論文も多数書いている。例えば白秋は民謡集『日本の笛』(アルス 大正十一年四月)の序文

に「民謡私論」を載せ、次のように書いている(同書には大島を扱った「大嶋」も収録され「いとシアンコは、サア、ノ嶋そだち。ヨ。」として大島に住む少女のことが詠みこまれている)。

民謡の言葉は無論平明である。すぐれた詩の見地から云へば卑俗の野調と云つていい。然し、民衆は主として卑俗である。教養が浅い。童謡が児童の言葉で作られねばならぬ如く、民謡は民衆の野調であらねばならぬ。その言葉でその人情を歌ふ。これはどうしても、私にしてからが十段も二十段も下に降つてゆく必要がある。私の民謡を卑俗と云ふ人があるかも知れぬ。卑俗で宜しいのである。而もその中に私の芸術があるのである。決して腹からの卑俗になるわけは無い。ただ馬子には馬子の言葉で、漁師には漁師の言葉で、そのまま自己の感動を伝へ、或は彼等の感情を代弁する。それが無くてもその歌謡がどうして彼等のものと成り得るか。これを考へてほしいのである。

自分を高みに持ち上げ、民衆を下に置いた「上から目線」の発言であるが、わらべうたの革新運動として童謡があり、また、民謡の革新運動として新民謡があったという流れがよく理解できる。また、こんなことも書いている。

私の民謡にはかうした民衆の代弁者として、可なり広汎な範囲に亘つて歌つたのと、此の自分自身の生活感情を民謡体を以て表現したのと、この二種が混淆してゐる。何れが第一義的かと云へば無論自分自身の民謡である事は否め無い。理想よりすれば、各地に於ける各種類の民衆それぞれ自身が、一々に自己の感情を民謡として表現し、それらの一大綜合が眞の日本の民謡となる事である。が、民衆それぞれ自身に無力であり、更に新しく進み得ぬ場合に、その代弁者として私のやうに代つて制作する事も致方の無い事である。これは民謡のみでなく童謡制作の場合にも同じ理由で釈明し得られる。

これも「上から目線」の発言であるように感じられるが、賢治が岩手に限定して文語詩を編み、拙論（「はじめに」『五十篇評釈』）で述べたように、賢治は民衆が何度も音読してくれるような詩を作ろうとした、ということにも通じる見解で、もしかししたら文語詩の創作に、雨情や白秋らの新民謡運動が背景にあつたのではないかとも思えてくる。

近藤周吾（「富山の文学 文学とサブカルチャーの『両輪騒動』」『日本近代文学95』日本近代文学会 平成二十八年十一月）は、富山県で文学が最も隆盛していたのは一九三〇年代だつたとし、その背景にあつたのが新民謡の流行なのだという。富山の状況と同じことが、賢治の頭の中で行われたとは即断

できないにせよ、賢治が白秋を敬愛していたことは事実である。例えば『春と修羅（第一集）』の「習作」で、白秋が作詞して、中山晋平が作曲した「恋の鳥」の一節が「とらよとすればその手からことりはそらへとんで行く」と一部改作されて引用されてもいる。また、白秋は多くの童謡の作詞も手掛けたが、賢治も「星めぐりの歌」を作詞作曲したことも知られているとおりで、白秋の童謡を載せていたのが『赤い鳥』で、賢治に童話制作のきっかけを与えたことも無関係ではないだろう。

白秋の詩歌を愛したのみか、おそらく白秋の童謡改革運動も意識していた賢治が、白秋の民謡に対する試みだけ拒絶したとは考えにくい。白秋が国柱会と関係があつたことも、親近感を増す理由になつていたかもしれない。

また、平沢信一（「宮沢賢治新資料60／新校本全集資料編 未収録生前批評 『民謡詩人』」『宮沢賢治学会イーハトーブセンター会報59』宮沢賢治学会イーハトーブセンター 令和元年九月）が発掘した草野心平による記事（「断片的時評」昭和三年九月）によれば、草野は「曾て北原白秋对白鳥省吾の詩か散文かの論争？（僕は読まなかつたが）があつたやうだが、右のやうなものなら詩も散文もなく、分りきつてゐる程詩ではない」と、白鳥の詩の一節をあげながら批判し、続けて「僕はアルノホルツを好きです。宮沢賢治を好きです。村山槐多を好きです」と書いていた。

賢治は会いたいと言ってきた白鳥に対し、一度は面会を約束しながらも断つたと言われている。白鳥自身は「宮沢くんとは詩集受取の簡単な札状以外に曾て文通した覚えもなく逢ひたいとか誰にか言伝てを頼んだこともありませぬ」（「草野心平君に」 「太平洋洋詩人」昭和二年四月）と書いているが、羅須地人協会時代に賢治宅に寝泊まりすることも多かった千葉恭

（「宮沢先生を追つて（三） 大桜の実生活」 「四次元7」 宮沢賢治友の会 昭和二十五年五月）は、白鳥の滞在する盛岡に行つて面会を断り、「都会詩人所謂職業詩人とは私の考へと歩みは違ふし完成しないうちに会ふのは危険だから」という賢治の言葉を伝えたという。

白鳥と千葉の両方が真実を語っていたのだとしたら、賢治に会いたいと言つたのは、白鳥と同道していた犬田卯だったのかもしれないし、盛岡の詩人たちが賢治に会わせようと勝手に動いていたのかもしれない。いずれにせよ、賢治は詩集を送るほどには白鳥を認識していたにしても、地人協会時代には、白鳥の詩とは距離があつたということのようで、このことは白秋への接近、そして白秋らの民謡運動の接近（あるいは白鳥をはじめとする民衆詩派からの離反）を示す補助線になるかもしれない。

また、草野の文章を賢治が読んだかどうかはわからないながら、掲載誌が「民謡詩人」であつたことも、当時の民謡ブーム

を物語っているよう。

そんな民謡運動であるが、小島美子（「新民謡運動の音楽史的意義」 「演劇11」 早稲田大学演劇学会 昭和四十五年三月）は、次のように総括する。

大正半ばから昭和初期にかけて、庶民たちのために新しい民謡を作る運動が音楽史上に現われるのである。それは大正七年頃から洋楽の芸術作品の上にはつきり表面化する、民族的伝統的表現への強い志向を基盤に、直接的には童謡運動に刺戟されて興つた運動であつた。しかしこの新民謡運動は、童謡運動ほどのなばなし高揚を見せないうちに挫折した。しかも当事者たちがそれをほとんど意識しなかつたほどの巧妙さで、当時の商業主義がそのエネルギーを吸収してしまつたのである。つまりその一部を巧みに利用したのが各地の観光宣伝用の新民謡であり、その大部分のエネルギーを吸収したのが、結局はレコードによる歌謡曲であつた。これが現在までつながる歌謡曲の直接的な出発点である。

最後に、もう一つだけ新民謡と賢治の接近を感じさせる一節があることを指摘しておきたい。「三原 第三部」には、「それは往くときの三崎だったとわたくしはおもひ／あの城ヶ島がどれであるかを見やうとして／しきいに瞳をこらしました

が」とある。三崎と城ヶ島は、どちらも神奈川県三浦半島の突端にある地名だが、賢治が城ヶ島に「あの」とつけたのは、北原白秋の「城ヶ島の雨」（初演 芸術座音楽会 大正二年十月）を踏まえての表現だろう。島村抱月の依頼で梁田貞が作曲した曲だが、新民謡の運動としては早い。後年の新民謡運動の出発点と言えるかもしれない。

また、三崎は松下俊子との姦通事件後に白秋が住んでいた場所であるから、賢治がここで三崎や城ヶ島の名前を記したが、白秋を踏まえてのものであったことは明らかで、実際に見てみたい気持ちもあったのだと思う。

もちろん、こうした状況だけで賢治と新民謡を繋ぐのは困難だろうと思う。また、仮に賢治が新民謡を意識することがあったにしても、賢治が新民謡として「しこのめ春の鶉の火を」を書いたとは言えない。そもそも、賢治は「ヤレ ホンニサ」といったはやし言葉を文語詩に使っていないし、時に漢文調、時に和歌調であった文語詩は、どの新民謡とも趣が異なっている。

しかし、先に引いた『日本の笛』の序文を読んでもみると、どうにも賢治と白秋とが、近い場所にいたように思えてならない。この問題については、今後も考えていきたい。

私が曾つて葛飾の或る寒村にゐた時に、毎夜のやうに庭の木

戸から這入つて来る頬冠りの若い衆達があつた。そして『唄はできてるかい』である。彼等は歌謡に飢えてゐたのである。で、私は『できてるよ』と云つて、一つ二つ書いてやる、それは喜んですぐに歌ひ乍ら出て行く、而して月の夜、螢の飛ぶ星の夜など、向うの川べりや田圃道を勝手に彼等の歌ひ慣れた追分や盆踊唄や都々逸などの調子に移しては流して歩くのだつた。その時、私の小唄そのものは既に彼等自身のものとなりきつてゐた。畢竟するに、私は彼等の歌はうとして歌へ無かつたものを、彼等の希望通りに歌つてやつたので、それで彼等は愉悦しきつたのである。民謡詩人の必要はここで生ずる。

先行研究

中野新治 「宮沢賢治 「推敲」をめぐって」 （『日本近代文学を学ぶ人のために』世界思想社 平成九年七月）

鈴木健司 「宮沢賢治文学における地学的想像力・《補遺二題》

>種山ヶ原<>鬼越山<」（『文学部紀要26-1-2』文教大文学部 平成二十五年三月）

信時哲郎 「種山ヶ原」（『一百篇評釈』）

6 十八菩薩峠の歌

廿日月

かざす刃は音無し

黒業ひろごる雲のひま。

その竜之介

風もなき

修羅のさかひを行き惑ひ

すゝきすがるゝいのじ原

その雲のいろ

日は落ちて

鳥はねぐらにかへれども、

人は帰らぬ修羅の旅、

その竜之介、

大意

二十日月の中を

かざした剣は音無し

悪行が雲の元に広がるうとしている、

その竜之介

風もない

人と修羅との境を行き惑う

すすきが末枯れるいのじ原の

その雲の色

日が落ちて

鳥はねぐらに帰るけれど、

修羅の旅から人は帰ってくることができない、

その竜之介、

モチーフ

中里介山の小説『大菩薩峠』に触発されて書かれた歌詞で、曲も賢治のオリジナルのようだ。賢治は大乗小説たる『大菩薩峠』の思想性を読み取ったのではないかと思われる。ただ、昭和三年二月に『大菩薩峠』が帝国劇場で上演されており、本作の下書稿(一)が昭和三年六月に賢治が大島に行った際の詩作が書かれた「三原三部」ノートにあること。また、大島に住んでいた伊藤チエが愛唱していたという証言を信じれば、昭和三年に伊藤兄妹と『大菩薩峠』に関するやり取りがあったのかもしれない。

語注

音無し 『大菩薩峠』のメインキャラクターであるニヒルな剣豪・机竜之介が得意とした剣法による音無しの構えのこと。黒業 よい行いである白業びやくに対して、悪い行いのこと。竜之介が遠慮会釈なしに人を斬ることを言うのだろう。中谷俊雄（後掲）によれば、『大菩薩峠』の「第十七巻 黒業白業の巻」から取っているのだという。

竜之介 『大菩薩峠』のメインキャラクターである机竜之介のこと。

いのじ原 『大菩薩峠』の「第二十二巻 白骨の巻」に出てくる草原。小沢俊郎（後掲）によれば、心の平安を得ていた竜之介が正当防衛の形で人斬りを再開させた場所で、「まさしくいのじ原は「修羅のさかひ」だった」という。また、尾崎秀樹（後掲B）は、介山がこの巻を書いたのが大正十四年であったことから、賢治の創作は大正十四年以降だろうという。鳥はねぐらにかへれども、人は帰らぬ修羅の旅、三重県の伊勢界隈の古謡である間の山節が『大菩薩峠』の「第六巻 間の山の巻」で、「夕べあしたの鐘の声／寂滅為楽と響けども／聞いて驚く人もなし」「花は散りても春は咲く／鳥は古巢へ帰れども／行きて帰らぬ死出の旅」と引用されているが、賢治はこれを踏まえて詞を書いている。

評釈

「三原三部」ノート」の六三ページに書かれた下書稿(一)、赤野詩稿用紙に書かれた下書稿(二)（タイトルは「大菩薩峠の歌」）、「三原三部」ノート」の六四ページに書かれた下書稿(三)、無野洋紙に書かれた下書稿(四)の四種が現存。ただし『新校本全集』によれば、下書稿(二)、(三)、(四)の先後関係は必ずしも定かではないとのこと。

昭和四十二年版の『宮沢賢治全集12』（筑摩書房）の「後記」には、「この地方に伝っている古い郷土芸能の旋律に賢治が詞をつけて、自己流に口ずさんだもの」とあるが、佐藤泰平（後掲）によれば、「古い郷土芸能の旋律くがどの曲であったのか未詳である。私が調べた範囲で賢治のふし全体と似ているものはなかった。ただ、日本放送出版協会が発行した『東北の民謡第一篇岩手県の巻』（一九四二年六月）の中に、紫波郡飯岡村地方の参佐踊（さんさ踊の唄其の二）がある。その出だしの旋律が賢治のとやや類似している、といえなくもない」とする。また中村節也（後掲）は、「これに似た曲想の歌が岩手の「ナニヤトヤラ」のなかにもある」として、青森県南部から岩手県北部に伝わる盆踊りに言及している。ただ、決定的なものは見つかっておらず、『校本全集6』に「藤原（嘉藤治…信時注）によれば、賢治が花巻町相生の藤原宅を訪れた折に歌ったのをただちに採譜したもの」とあり、『新校本全集6』では「平成三年八月、宮沢清六の記憶にもとづいて佐藤泰平が採譜し直し

たもの」とされるのみである。

『大菩薩峠』は、中里介山の大衆小説で、大正二年から都新聞などで連載され、昭和十九年に作者の死により未完に終わった。介山は大衆小説とされるのを嫌い、単なる大衆向けのチャンバラ小説ではなく、冒頭に「全篇の主意とする処は、人間界の諸相を曲尽して、大乘遊戯の堺に参入するカルマ曼荼羅の面影を大凡下の筆にうつし見んとするにあり」と掲げている。

関徳弥（「読書力」『賢治随聞』角川選書 昭和四十五年二月）によれば、賢治は『大菩薩峠』をこう読んでいたようだ。

ひところ『大菩薩峠』が流行の書になって、私たちは音なしの構えとか、机竜之介とか、お銀さまとか三人合えばそんな話をしていたころです。五冊か七冊のその大菩薩峠を賢治はわずか二時間か三時間で読まれたそうだといって私達はおどろいたものです。そのほか大菩薩峠の歌曲を作ったりしているのですから、みんなすごいなあ、といました。

また、「専許 剣術号」なるメモには「机竜之介近藤勇など書いてある」として、「一挙二十間の遠くまで追ってこれを斬る、」という恐るべくしてユーモラスな自動殺人機」（小沢後掲）が書いてあり、賢治の意図するものが何であったかは量りかねるものの、『大菩薩峠』と、その登場人物である机竜之

介が、賢治にとつてかなり気になる存在であったことは確かなようだ。

関の証言が、いつ頃のものかわからないが、第二連に登場する「いのじ原」の場面は『大菩薩峠』の「白骨の巻」であり、尾崎秀樹（後掲B）が言うように、介山の執筆時期が大正十四年であることを思えば、少なくとも、この詞の制作はそれ以降だとするのが妥当だろう。

介山は『大菩薩峠』を大衆小説と呼んだが、小説で「鳥は古巣へ帰れども／行きて帰らぬ死出の旅」とあったものを生かしながら、賢治は「鳥はねぐらにかへれども／ひとはかへらぬ修羅の旅」と書き替えていることなど、チャンバラ小説としてのおもしろさも踏まえた上で、『大菩薩峠』の抱えたテーマについても十分に理解していたものと思われる。

尾崎（後掲B）は、「白骨の巻」で「竜之助の暗殺剣ではなく、「修羅のさかひを行き惑」う竜之助の合区に憑かれた姿」として、『大菩薩峠』の次のような箇所を引いている（引用は尾崎より）。

誰と戦つて、誰のために傷つけられた。相手はどこにいる、どこにもいないではないか。連れはどこにいる、それも見えない。／こういう場合には、傷ついたよりも、殺された方が幸である。殺されて屍を荒原に横たえ、魂を無漏の世界へ運

んだ方が安楽で、傷ついて助けのない道を、のたり行く者の苦痛とは比較になるまい。／誰か通りかかる人はないか。通りかかって、このあわれな負傷者をいたわってやるものはないか。いたわってやる余裕と勇気がなければ、せめて遠くから、その方角を教えてやれ。この男は時々、真直な道をさえ間違えて、草原に迷い入り、南北をわすれてしまうではないか――傷ついたのみならず、彼は、もう眼が見えなくなっている。

ここは中村晋吾（後掲）が引く「土神ときつね」の「土神はまるでそこら中がまっ白な火になって燃えてゐるやうに思ひました。青く光ってゐたそらさへ俄かにガランとまっ暗な穴になってその底では赤い焰がどうどう音を立て、燃えると思つたのです」をも思わせるものがある。

国柱会の田中智学も『大菩薩峠』に惹かれた一人であり、たとえば「読売新聞」や「朝日新聞」の昭和二年十月二十七日朝刊には春秋社の『普及版 大菩薩峠』（全六巻）の広告が載り、そこには「田中智学先生曰く」（元は大正十五年五月十六日「天業民報」掲載）として、次のように書かれている。

篇中の人物で終始一貫に奇を弄することなく、蕩々乎として無垢無染の描写で押し通して居るのは、机龍之助である、

而して作者がこの人物の描写に際し、いつも例外なしに吾人に与ふところは、ぞ一つとする様な鬼気である、実に心境一如の筆致とは、かういふのを言ふのであらう、他の人物叙述には巧いと思ふことが往々ある。この机龍之助の叙述には巧いも拙いも考へられない、只恐ろしくなる、それで作者は決して技巧を練つて書いてゐるのではない、只真実に斯う云ふ人物の変態心理を忠実に描写して居るのである。

そして、智学は「大作家の馬琴と相對して二三枚がた上の作者だ」としたうえ、「所謂「法界を以て一身と為し万古を以て一息と為す」の心境に住せずば遊戯三昧の法樂は受けられない、予はたのしんで出来るだけ読まうとおもつてゐる」とする。小説としての面白さとともに竜之助の底知れない不気味さ、そして仏教的な無常觀を読み取つてゐるよう、介山と智学、賢治は、同じ感情を共有できていたように思われる。

『大菩薩峠』は大正十年に新国劇の沢田正二郎によつて舞台化されて好評を博したが、介山が公演を続けさせず、次に舞台化されたのは昭和三年二月であつた。上田哲（後掲）の書くように、この時、介山を舞台化に踏み切らせたのが田中智学であつた。智学は介山に長文の親書を送り、上演許可を求めたところ、「中里氏は、先生にしてかく迄云はるゝ以上は若し先生自ら脚色の任に当たらるゝならば、これ最早単なる演劇でなくて、

一種崇敬的意義ある法楽三昧ともなるべしとして、遂に翻然その態度を改めて上演を快諾」（『天業民報』昭和三年一月十一日。上田・後掲より）したという。

この時に舞台化された「大菩薩峠」は、大きな評判となったが、「読売新聞」で七日間（昭和三年二月五日〜二月十二日）に渡って中内蝶二に「問題の大菩薩峠」（第一回の副題は「未熟極まるその脚色」、第二回の副題は「脚本ことごとく役者を殺す」として論じられたように、決して評価は高くなかった。

もちろん賢治もこうした情報については知っていただろう。中村晋吾（後掲）も書くように、本文語詩「大菩薩峠の歌」の第一形態は、昭和三年の日付のある「三原三部」ノートに書かれているからだ。日程的に賢治がこの舞台を見たとは考えにくい、文語詩の制作背景には、この時の舞台化のニュースがあつたと考えるのが自然であるように思う。

ただ、もう一つおさえておきたいことがある。高木栄一の「回想―国分寺在（三原三部の人）」（『賢治研究57』宮沢賢治研究会 平成四年三月）である。高木は、昭和二十年の春頃、B 29の編隊が空を飛んでいく中を、東京・国分寺に伊藤チエを訪ねたという。

確かその時であつたと思う。ウェーバー原曲になる賢治の「火の島の歌」をうたつて下さったのは。大島での生活の感

概が込められていたのか、静かな歌い方ではあつたが、しみじみとした歌い方をされていた。その後、部屋の中であつたが、「大菩薩峠の歌」もちよつと口ずさんで下さった時もあった。二つの曲、ともに当時そのメロディを知らなかった私にとつて、その印象は鮮明であつた。

チエは、賢治の婚約者だつたともされる人物で、昭和三年六月に賢治がチエの兄・七雄が大島に農芸学校を開設しようとした際に大島で会っている。おそらくはその時、「火の島の歌」とともに「大菩薩峠の歌」も教えられたのではないだろうか（同年の春にも花巻で二人は会っているが、この時に大島を描いた「火の島の歌」を教わつたとは考えにくい）。

賢治とチエの関係を必要以上に誇張するつもりはないが、この歌から賢治の修羅意識、殺伐とした竜之介の修羅を探るだけではないけなように思う。大島で新しい時代の農業教育を語りながら、賢治と伊藤兄妹は『大菩薩峠』についても語り合い、三人で歌詞の文言を考える機会もあつたかもしれない。もちろん「未定稿」の「（し）のめ春の鴉の火を」も歌つただろう。

ちようど前章で「三原三部」をチエに引き付けて考え過ぎであることを指摘したばかりだが、ここではチエに引き付ける考え方を提案しておきたい。

先行研究

五月)

尾崎秀樹A「大菩薩峠と宮沢賢治」（『賢治研究3』宮沢賢治研究会 昭和四十四年十二月）

中村節也「「コールサック」版・賢治歌曲解説」『宮沢賢治の宇宙音感 音楽と星と法華経』平成二十九年八月）

小沢俊郎「いのじ原考」（『賢治研究3』宮沢賢治研究会 昭和四十四年十二月）

中谷俊雄「大菩薩峠の歌」（『宮沢賢治研究130』宮沢賢治研究会 平成二十九年十一月）

尾崎秀樹B「修羅の世界 宮沢賢治と中里介山」（『現代詩読本12 宮沢賢治』思潮社 昭和五十四年十二月）

伊藤和也「宮澤賢治と介山」（『中里介山論』未来工房 昭和六十一年七月）

上田哲「田中智学と国柱会の文芸運動」（『宮沢賢治 その理想世界への道程』明治書院 平成二年四月）

7 田園迷途信

遠藤誠治「宮沢賢治「風の又三郎」の一側面『大菩薩峠』との関係を中心に」（『中里介山その創世界『大菩薩峠』と現代文学との連関』オリジン出版センター 平成六年二月）

佐藤泰平「賢治が作詞・作曲した曲」（『宮沢賢治の音楽』筑摩書房 平成七年二月）

十の蜂舎の成りしとき
よき園成さば必らずや
鬼ぞうかがふといましめし
かしらかむろのひとありき

白岩建二「大菩薩峠」を読む 宮沢賢治と中里介山」（『かまくら・賢治4』鎌倉・賢治の会 平成十三年八月）

豊田英文「宮沢賢治の音楽」（『国文学 解釈と鑑賞71-9』平成十八年九月）

山はかすみてめくるめき
桐むらさきに燃ゆるころ
その農園の扉を過ぎて
莓需めしをとめあり

中村晋吾「介山・賢治・国柱会 歴史研究と『大菩薩峠』への一視点」（『民衆史研究会会報65』民衆史研究会 平成二十年

そのひとひるはひねもすを
風にガラスの点を播き
夜はよもすがらなやましき

そのひとひるはひねもすを
風にガラスの点を播き
夜はよもすがらなやましき

そのひとひるはひねもすを
風にガラスの点を播き
夜はよもすがらなやましき

そのひとひるはひねもすを
風にガラスの点を播き
夜はよもすがらなやましき

うらみの歌をうたひけり

若きあるじはひとひらの

白銅をもて帰れるに

をとめしづかにつぶやきて

この園われが園といふ

かくてくわりんの実は黄ばみ

池にぬなはの枯るゝころ

をみなとなりしそのをとめ

園をば町に売りてけり

大意

蜜蜂の入る小屋が十もできるような

よい農園ができたならば必ず

鬼がやってくるものだど戒めた

頭の禿げた老人がいた

山はかすんでめくるめくように

桐の花が紫に咲き誇るころ

その農園の扉を開けて

イチゴを買いに来た乙女がいた

その人は昼間はただひたすらに

風の中にガラスの粒をまきちらし

夜もずつとなやましい

演歌を歌ってばかりいた

若い農園主は一枚の

白銅貨を持って帰ってきたが

乙女はしづかに

この農園は私のものだとつぶやいた

かくして花梨の実は熟し

池にはジュンサイの葉が枯れる季節になると

女になった乙女は

農園を街の人間に売ってしまった

モチーフ

何を意味しているのかわかりにくい、同じ頃に書かれた「一

〇七一「わたくしどもは」と並べてみれば、男と女の関係

に金がかかっているという点に共通性が見出せるだろう。昭和

二年春、賢治は花巻温泉の花壇設計を依頼されたが、花巻温泉

は賢治自身「賤舞の園」「魔窟」と呼ぶような場所であった。

基本的には都会からの客を招く施設であったが、地元で成功した農園主たちも、次々に魔窟に引き込まれ、ついには農園まで手放すことになる、という寓意ではないかと思う。

語注

蜂舎 伊藤眞一郎（後掲A、B）によれば、避寒などに際して蜂箱を収蔵する設備のこと。「>十の蜂舎<を備える農園はそれ相応な規模の農園ということにな」（引用B）るだろう、という。

鬼 『日本国語大辞典』によれば（1）として「死者の靈魂。精霊」、（2）「人にたたりをすると思はれていた無形の幽魂など。もののけ。幽鬼」、（3）「想像上の怪物。仏教の羅刹（らせつ）と混同され、餓鬼、地獄の青鬼、赤鬼などになり、また、美男、美女となって人間世界に現われたりする」、（4）「民間の伝承では、巨人信仰と結びついたり、先住民の一部や社会の落伍者およびその子孫としての山男と考えられ、見なれない異人をさす場合がある。また、山の精霊や耕作を害し、疫病をもたらし人間を苦しめる悪霊をもさす場合がある」、（5）「修験道者などが奥地の山間部に土着した無名の者」などがあるが、いわゆる妖怪としての鬼が登場しているわけでもないことから（2）が近いかと思われる。ただ『遠野物語』の採取者である佐々木喜善とも交流

があり、「ざしき童子のはなし」が喜善に引用されることもあった賢治であったことを思えば、民俗的な伝承、つまり（4）も背景にあったと考えてよいかもしれない。また、下書稿（一）に「化の鳥」がやつてきて村に災いをもたらしたといった記載があることから「姑獲鳥」（ウブメあるいはコカクチョウ）をイメージしていたのかもしれない。産婦が死んで化けたものとも、あるいは想像上の怪鳥であるともいう。『日本国語大辞典』によれば「その泣き声は、幼児の泣くのに似て、夜間飛来して幼児に危害を加える」（姑獲鳥の項）とあり、下書稿（一）の「なやましき声をあげわたし」にも通じるところがある。あるいは、七草粥を作る際に「七草なずな 唐土の鳥が 日本の国に 渡らぬ先に ストントン」と歌われるところの「唐土の鳥」を考えるべきかもしれない。「七草草紙」（『御伽草紙』）によれば、寿命が八千年にもなる白鷺鳥の延命の理由は七草を食べることだとされ、一説によれば、その鳥は鬼車鳥（きしゃどり）を指すのだともいう。玉田永教の「年中故事」（『続日本随筆大成別巻』吉川弘文館 昭和五十八年八月）「怪異・妖怪データベース」国際日本文化研究センター）には、「唐土の嶺南山に鬼車鳥という毒をもった鳥がおり、夜中は人家の軒下において、捨てた人の爪を食べるといふ。この鳥は子供の乾いた着物に毒を掛け、それを知らずに着ると瘡の病を患うという」。賢治の頭には、女・鳥・災厄・鬼とい

ったイメージが連続していたようだが、これら中国の伝承に通じるところもあったのかもしれない。ちなみに「鬼」の読み方は、入沢康夫（後掲B）が言うように、音数の関係から「キ」と読ませたかったのであろう。『宮沢賢治コレクション10』にも「き」のルビがある。

かむろ 「禿」の字をあて「かぶろ」とも読まれた。おかつば髪のことと言うが、ここは禿げ頭のことであろう。下書稿(一)には「かしらかむろのひと」の前の段階で「故老↓齒↓削」とすることがあった。

苺需めしをとめ イチゴ栽培は岩手県でも大正末期から昭和初期にかけて導入され、高級果実として栽培されていたという。伊藤（後掲A、B）は岩手県で明治四十四年から東北最初の專業養蜂家となった藤原養蜂場の三代目社長・藤原誠太への聞き取りから「イチゴをはじめとして、果樹栽培での蜜蜂の役割は非常に重要で、当時すでに、養蜂業者が受粉用に蜜蜂の貸し出しも行っていたらしい。養蜂とイチゴとは、確かに結びついていたわけである」（引用B）としている。島田隆輔（後掲）は、『岩手県農業史』（岩手県昭和五十四年三月）の統計表から、「1畝を越える苺の作付けは、大正時代の4年間だけという実態がみえる。つまり、苺は季節限定のそれなりに希少な、高級果実だったと思われる」とする。ガラスの点 先行する口語詩には「黄いろの巨きな鳥」が「そ

このらはまだつめたい空間に／光るペッパの点々をふりまき」とあり、これが疫病のように蔓延して「仕事のなかに芸術を感じ得る／その力強さが喪はれてゐた」となっている。文語詩の下書稿(一)で「巨きな鳥」は「化の鳥」になって「かゞやくこしやうさてはまた／ガラスの点をふりま」く。下書稿(二)では「化の鳥」が「をとめ」に改変されるが、ペッパや胡椒は削除されて「ガラスの点」のみとなる。島田（後掲）は、「「昼」は娼妓として媚を売り、「夜」は歌妓としても宴席に侍る」とし、「白粉やその香気を振りまいていいるさまが想起される」とする。ただ、ガラスと白粉には飛躍があるように感じるので、ここでは、人々から労働意欲を奪い取る病原菌のようなものを表すために、一見するとキラキラ美しく見えるが、体内に取り込んではいけないものとして、ガラスを比喻として用いたと解しておきたい。「歌稿〔B〕」の660に「みそらには／秋の粉ぞいちめんちりわたり／一斉に吹く／白百合の列。」があり、また662に「そらはまた／するとき玻璃の粉を噴きて／この屋根窓のレースに降らす。」ともある。

うらみの歌 島田（後掲）は、乙女を娼妓であるとし、「不幸せなその身の上についての哀しい訴え」とする。『日本国語大辞典』で「恨歌」を調べると「恨みの気持を詠んだ和歌」とあったが、『デジタル大辞泉』の「恨み節」では「恨みを

表現する歌詞、暗い感じの曲調を持った歌曲」とあった。ここでは特に恨みの念を込めた歌という意味ではなく、演歌や艶歌と呼ばれる類の歌とすべきかと思う。『日本国語大辞典』には「艶歌」について「つやつぱい歌。色気を感じられる内容の歌」と書かれ、「演歌」については「明治一〇年代（一八七七〜八六）に、自由民権思想の普及の目的で、演説を歌に変えたもの。のちには、政治活動から離れて、街頭などで、三味線、月琴、アコーディオン、バイオリンなどに合わせて、悲恋心中などの人情物をうたって、歌の本を売る遊芸をさすようになった」とあったが、例えば大正三年に発表された島村抱月の作詞による「カチューシャの歌」（カチューシャかわいや わかれのつらさ／せめて淡雪 とけぬ間と／神に願いを（ララ）かけましょうか）のようなものではなかったかと思う。今日でも、演歌は別れや恨みといったマイナスの感情を短調で歌いあげるものが多いように思うが、そうしたものを歌っていたのだろう。

くわりん 中国原産のバラ科の落葉高木である花梨のこと。

「風の又三郎」の冒頭に「すっぱいくわりんもふきとばせ」として登場する。実は十〜十一月に収穫される。

ぬなは 蓴菜のこと。沼繩とも書いた。日本に自生する水草で食用。独特のぬめりのある食感が愛された。秋になって葉が枯れてきたのだろう。

をみなとなりしそのをとめ 農園を訪れた時は乙女であり、それが女になったということ。露骨に言えば「若きあるじ」と肉体関係をもつて女になったということだろう。「一百篇」の「「燈を紅き町の家より）」は、紅燈の町の「をみな」から仕事場に電話がかかってくる男について描かれているが、下書稿(一)には「欺きてをみなとなし」だが、その後は「あらたなるをみなを漁りぬ」とある。

評釈

「詩ノート」の「二〇四五 「桃いろの」 一九二七、四、二四、」を文語詩に改作したもの。無罫詩稿用紙に書かれた下書稿(一)、その内容を藍インクで書き直した下書稿(二)（タイトルは「田園迷信」。藍インクで①）の二種が現存。また、赤インクで「口語」（のちに藍インクで削除）、左肩に藍インクで「Fragment」とあるが鉛筆で削除されている。

本作は入沢康夫（後掲A）が物語風の詩でありながら、「脈絡の辿り難さ」は少々度はずれではあるまいか」とするくらいに「欠落」が目立っていることを指摘している。

天沢退二郎（後掲A）は、下書稿に「九百二十六年」とあったことから一九二六（昭和元）年の事件を丹念に追いかければ「カギ」が見つかりそうにも思うが、今のところそれも見つかっておらず、「私自身の直感的な読みは、これは夢記述だとい

うアイデアである」とする。

また、伊藤眞一郎（後掲A、B）は、岩手県内における養蜂やイチゴ栽培といった現実的な方向からのアプローチを試みる。

島田隆輔（後掲）は、「をとめ」を娼妓であるとし、農園主は「ひとひらの白銅」で「をとめ」を身請けし、そのために彼女は「この園われが園といふ」と、喜びをかみしめているのだという。非常に興味深いのが、問題もあるように感じるので、以下、島田論を再検討しながら自説を述べたいと思う。

まず口語で書かれた先行作品から見ていきたい。「詩ノート」の「二〇四五 「桃いろの」」である。製作日は昭和二年四月二十四日、羅須地人協会時代だ。

桃いろの

アガーチナスな春より少しおくれ
ぼんやりした黄いろの巨きな鳥がやってきた
それはそこらのまだつめたい空間に
光るペッパーの点々をふりまき
またひとびとの粗暴なからを盗みあつめて
ちやうど太陽に熟した黄金の棘ができるころ
東の方へ飛んで行ったのだ
さうして

この歳はもうみんなには

仕事のなかに芸術を感じ得る
その力強さが喪はれてみた

賢治は「マリヴロンと少女」で「正しく清くはたらくひとはひとつの大きな芸術を時間のうしろにつくるのです」と書き、「農民芸術概論綱要」でも、こうした思想を語っているが、黄色い大きな鳥がペッパーの粒を振り播くと、ひとびとは労働の中に芸術を感じることもできなくなった、というのである。現実に起こった事件ではなく、おそらく象徴的に語っているのはあろうが、不吉さが漂う詩である。続いて、これを文語化した下書稿(一)を見てみたい。

九百二十六年の

桃の花よりやゝ過ぎて
その玢岩の溪谷に
化の鳥一羽渡り来ぬ
鳥は黄いろの膨らみて
膠朧質のピンクの春に
かゞやくこしやうさてはまた
ガラスの点をふりまきて
夜ごとに訴へかなしめる

なやましき声をあげわたし

ひるも林や丘丘や

スカイラインの紺にうたひて

ひとびとの粗暴なる力を盗みあつめ

あたかも太陽に熟したる棘の成れるころ

東の青くけぶれる海へ飛び去りにけり

かくてたばこの燃えて立ち

稲がちいさき鳥の羽をつけしとき

人々全身 赤き斑点に冒された

胸やせなかに大なる穴を明けられて

死したるもありそのまゝに

息のみをつくミイラとなれるもありにけり

ここでは人々が赤い斑点に冒され、胸や背中に穴があいて、死んだりミイラのようになった者もある、と、かなり直接的な表現に変わっている。

そして下書稿(二)となると、訪れるのが「をとめ」となり、手入れの段階で「若きあるじ」が登場して「ひとひらの白銅」という金銭も登場することになる。

先行作品である「一〇四五 「桃いろの」」が書かれた昭和二年四月、賢治は花巻農学校時代の教え子であった富手一の依頼により、花巻温泉の花壇設計に携わった。しかし、花巻温泉

とは「賤舞の園」(「歳は世紀に曾て見ぬ」 「未定稿」)、あるいは「魔窟」(「一〇三三 悪意 一九二七、四、八、」 「春と修羅 第三集」)と呼ばれる場所であり、賢治は自分が花巻温泉に関わることについて複雑な心境であったと考えられる。

同じ年の六月一日に、賢治は「一〇七一 「わたくしどもは」 一九二七、六、一、」を書いているが、これも若い男と女の物語風の詩である。

わたくしどもは

ちやうど一年いっしょに暮しました

その女はやさしく蒼白く

その眼はいつでも何かわたくしのわからない夢を見てゐる

やうでした

いっしょになったその夏のある朝

わたくしは町はづれの橋で

村の娘が持つて来た花があまり美しかったので

二十匁だけ買ってうちに帰りましたら

妻は空いてゐた金魚の壺にさして

店へ並べて居りました

夕方帰つて来ましたら

妻はわたくしの顔を見てふしぎな笑ひやうをしました

見ると食卓にはいろいろな菓物や

白い洋皿などまで並べてありますので

どうしたのかとたづねましたら

あの花が今日ひるの間にちやうど二円に売れたといふので
す

……その青い夜の風や星、

すだれや魂を送る火や……

そしてその冬

妻は何の苦しみといふのでもなく

萎れるやうに崩れるやうに一日病んで没くなりました

伊藤眞一郎（「萎れるやうに崩れるやうに」「わたくしどもは」）（『宮沢賢治>旅程幻想<を読む』朝文社 平成二十二年十一月）は、自分という花を売った対価として金銭を受け取っているのではないかとしたが、筆者も「五十篇」の「萎花」を論じた際（『五十篇評釈』）、伊藤の指摘を受け入れつつ、我が身を売っては短い人生を終えていく女性たちへの思いが溢れており、花巻温泉の花壇設計に携わった際の罪障感があるのではないかとした。

同じ年に書かれた「二〇四五 「桃いろの」」も、花巻温泉や芸娼妓に関する思いをアナロジカルに書いたものだと思うが、「二〇七一 「わたくしどもは」」では、我が身を売

って病没していた女性が、「二〇四五 「桃いろの」」では、「この園われが園と」主張して「園をば町に売りてけり」と、なんとも逞しい。

逞しいだけではなく、下書稿から文語詩の最終形態までの推敲過程を見てもわかるとおり、「巨きな鳥」や「化の鳥」が「をとめ」に変化して、農村に「光るペッパーの点々」や「ガラスの点」を振りまき、農民たちの「仕事のなかに芸術を感じ得る／その力強さ」を喪わせたり、「胸やせなかに大なる穴を明けられ」、「死したるもあり」、「ミイラとされるもあり」といった惨劇を引き起こしてもいる。「かしらかむろのひと」が「鬼ぞうかがふといましめ」た、その鬼こそが「をとめ」であったことは明白である。

しかし、島田（後掲）は、そうした読み方も可能であることを認めながら「をとめ」を弁護する側に立つ。

そのをとめ／園をば町に売りてけり

とあるのも、もちろん売り主は「若きあるじ」なのだが、彼女にとっても初めて「われが園」といえたものを手放さねばならない、しかもその要因が自分を身請けしたことにあるとすれば、その哀しみや寂しさに、夫にしたがって耐えるすがたが示されようとしているのではないか。ここは、「そのをとめが」でなく、

をみなとなりしそのをとめなの、

と読んでみるのである。積み重なった借金を返済するには、農園を手放すよりほかもう手はなくなった。そこまでふたりは追いつめられて、「町の資産家または企業家」に買い取ってもらったというふうを読むのである。

それでは冒頭の「鬼ぞうかがふ」という「いましめ」についてはどうかというと、「農村から不幸せな」をとめ」を続出させる、その時代と社会とのありようのほうであろう。それこそが「鬼」なのではあるまいか」とする。

さらに島田は、よい農園を持つとういう心を持つことが鬼を引き入れてしまうのだとすれば、「今ある生活の現状に甘んじていよ」といったメッセージを読み取れるようにも思えるが、それは「田園」の「迷信」であり、「不条理な現実に変えなければならぬし、変えるのはこの「田園」に生きる人々自身だ」といいたいのではなからうか」とする。

たしかに論理的にはその通りかもしれないが、では、賢治は農民たちに経済力をつけて放蕩をするように薦め、よい「をとめ」を見つけて身請けしてやることこそが農村変革の道だと言っているのだろうか？ これでは金持ちの俗物たちの夢と同じではないだろうか。

売春させられる「をとめ」は、生きていくために、それ以外

の道を選ぶ可能性が残っていなかったと思えるが、「をとめ」を買う男の側に、どうしても「をとめ」を買わざるを得ない理由があったとは思えない。「をとめ」たちの生活を安定させるために、男たちは魔窟を訪ねよ、というのが賢治の主張だったというのだろうか。

確かに「一百篇」の「燈を紅き町の家より」では、娼妓をその気にさせておきながら裏切った男に対し、「いざ行きてかのひとを訪へ」(下書稿(一))と書いたこともあった。しかし、これは非常手段であって、賢治が売春を讚美していたわけではないだろう。

賢治は「一〇七一」「わたくしどもは」で、二円で花を売った妻に「一日病んで没くな」らせているが、「田園迷信」では「をとめ」を悪者として描き、養蜂などで蓄財した農民が被害者であるように描いたとした方がすっきりするのではないだろうか。もちろん被害者といえながら、男たちは自由意志で散財しているだけなのに対して、生きていくために身を売ることかかない女を加害者扱いするのはふさわしくないという批判はあり得るだろうが：

賢治が文語詩の多くの作品で芸娼妓に同情的なのは、島田が「>歌ひめくの詩系譜を読む」(『宮沢賢治研究 文語詩稿序説』朝文社 平成十七年十二月)などで論じているとおりで、栗原敦(「うられしをみなこのうた」『宮沢賢治 透明な軌道

の上から』新宿書房 平成四年八月)も、また筆者も『五十篇評釈』や『一百篇評釈』で、同じ事を何度も書いて来たところである。

しかし、例えば「詩ノート」の「二〇三四」〔ちゞれてすがすがしい雲の朝〕一九二七、四、八、八〕にある「遊園地ちかくに立ちしに／村のむすめらみな遊び女のすがたとかはりぬ／そのあるものは／なかばなれるポーズをなし／あるものはほとんど完きかたちをなせり」という詩句はどう解すべきだろう。「村のむすめら」まで、花巻温泉の開業とともに「遊び女のすがた」を嬉々として装うようになってしまっているのである。

『全国遊郭案内』（日本遊覧社 昭和五年七月）では、花巻温泉について「淡い旅愁を忘れやうとする旅人が、一夜を過すために滞在する者が多い。一見芸妓である様であるが、芸妓兼酌婦兼娼妓の様な役割を勤めるので、旅館で呼んでも何日でも遠征して来る」と紹介されていた。

「花巻温泉ニュース 創刊号」（昭和四年七月十五日）を見ると、「紅筆たより」として、割烹・和良久の三女性が紹介されている。

富貴子（和良久）

この温泉花柳界の主？至つて愛嬌ものゝ芸も相当にあり男

を手玉に取る事も相当に上手。花王石鹼のニツクネームもあれ共浅学にして其根拠を知らず。二十七歳の働き盛り

京子（和良久）

スポーツ芸者の称あり。スキーよし、自転車オーライ。野球もつて来い、テニス御座れお負けに腹芸のチャンピオンとか鼻下長連御用心の事、二十三。

八重子（和良久）

若い男から来る甘つたるい手紙は三度の飯よりも好き、若い男は尚更すき都々逸文句を電報にして口解く御親類筋もある。酒は銚子で十本定量。顔もよし芳純正に十九。

もちろん、これは仕事であり、生きていくためにせざるを得なかったことであつて、男性とのやり取りが本当に好きでこの世界に入つて来た者など、まず、いなかったに違いない。

しかし、そうした彼女たちの振舞いが、「二〇三四」〔ちゞれてすがすがしい雲の朝〕にあつたように農村の女性たちのファッションや文化に影響を与え、「二〇四五」〔桃いろの〕〕にあるように、農村の男たちの意識も変えてしまったといふことは十分に考えられる。古来より、遊女が軽蔑の対象でありながらも、憧れの対象であり続け、そのファッションや文化が素人女性たちのモデルになった事例も枚挙にいとまがない。

「二〇四五」〔桃いろの〕〕は、文語詩化が試みられて「田

園迷信」として①まで付けられ、やはり花巻温泉の開業を扱った「一〇八六 ダリヤ品評会席上」も「(歳は世紀に會て見ぬ)」として文語詩化が試みられて①の段階まで推敲が進められていた。どちらも「未定稿」のまままでどまってしまったわけだが、これは花巻温泉の経営にも関わっていた宮沢家をはじめとする花巻財界批判をためらったためなのか、それとも別の理由があったからなのか。残念ながらこの先について論じる資料を持っていない。

先行研究

- 入沢康夫 A 「化鳥の変貌」 (『宮沢賢治 プリオシン海岸からの報告』筑摩書房 平成三年七月)
- 天沢退二郎・西谷修 「賢治、あるいは夜と戦争」 (『現代詩手帳 39-11』思潮社 平成六年十一月)
- 天沢退二郎 A 「宮沢賢治 夢を生きた詩人」 (『宮沢賢治』注』筑摩書房 平成九年七月)
- 伊藤眞一郎 A 「宮沢賢治と養蜂・覚書」 (『安田女子大学言語文化研究所要覧 9』安田女子大学言語文化研究所 平成十一年)
- 伊藤眞一郎 B 「『田園迷信』覚書 > 蜂舎くをめぐって」 (『論攷 宮沢賢治 3』中四国宮沢賢治研究会 平成十二年八月)
- 入沢康夫 B 「『田園迷信』」 (『宮沢賢治 文語詩の森 第二集』

柏ブラーノ 平成十二年九月)

宮沢健太郎 「『文語詩・未定稿 鬱蒼たる豊穡』」 (『国文学解釈と鑑賞 66-1-8』至文堂 平成十三年八月)

天沢退二郎 B 「詩人、詩篇、そしてデモン 宮沢賢治の文語詩篇における「売る行為」を読む」 (『宮沢賢治』のさらなる彼方を求めて』筑摩書房 平成二十一年七月)

島田隆輔 「附 田園迷信」 (『文語詩稿』未定稿の研究／無野用紙詩群篇・訳注(稿) 遺稿 2・4 番』[未発表] 平成二十九年六月)

8 樹園

かはたれは青く這ひ来て
しめやかに木の芽ほごるゝ

鳥飛びて気圧を高み
しんしんと齒痛は起る

ぎこちなる独乙冠詞を
青々となげく窓あり

大いなる帳簿を抱き
守衛長木の間を過ぐる

大意

夕暮れ時が這いよるように青く迫ると
しずかに木の芽がほぐれる

鳥が飛び気圧が高いこともあつて
しんしんと歯痛が起きる

ぎこちないドイツ語の冠詞の歌を
青々と読んでいる声が窓から聞こえてくる

大きな帳簿を抱いて
守衛長が木の間を過ぎていく

モチーフ

盛岡高等農林学校のキャンパスを舞台にしたものだろう。先行作品である「歌稿〔B〕」の238には「◎見本園の夕暮」とのメモがあるが、この他にも同時期には「◎苺畑の柘植先生」「◎果樹園にして手をかなしめる人」「◎果樹園の白き夕日」といったメモがあり、「五十篇」の「著者」とイメージが重なる部

分も多い。本作は「未定稿」に終わったが、「著者」とは兄弟作品であり、「対」の意識が働いていたのかもしれない。

語注

ぎこちなる独逸冠詞 下書稿(一)には「独逸冠詞のうた」ともあり、「[der des dem den/die der der die]」「[das des dem den/die der den die]」とドイツ語がそのまま書かれていた。ドイツ語の定冠詞の格変化で、ドイツ語の初歩で必ず暗唱させられるものだ。盛岡高等農林の学生たちが、暗記のために声を出して覚えているのだろう。なお「ぎこちなる」について『新校本全集』では、保阪嘉内に宛てた大正五年八月十七日の書簡中の短歌にも「ぎこちなる独文典も」とあり、「賢治の言葉癖かとも思われるが、本文では校訂した」と「ぎこちなき」に改めている。本稿では原文を生かした。

青々となげく窓あり 「青々と」とは青年たちの青、つまり若さのことであつて、必ずしも色彩の青ではないだろう。島田隆輔(後掲A、B)が『古典基礎語辞典』(角川学芸出版平成二十三年十月)における青の項に「植物の実が未熟なとき青いことから、年が若く物事に不十分なさま。未熟に至らない」と引用しているとおりだろう。先行作品である短歌「しめやかに／木の芽ほぐるゝたそがれを／独逸冠詞のうた嘆きくる。」を読むと、たそがれ時に「独逸冠詞のうた」を口

ずさんでいたのは、賢治であったように思われるが、推敲が進むと、高等農林の窓（島田（後掲A、B）によれば「たそがれ」の時間帯であることから授業中ではなく、学生寮だろうという）から聞こえているように虚構化させている。

守衛長 盛岡高等農林学校の守衛長のことか。現在も岩手大学には明治三十六年に正門（現在の通用門）脇に建てられた門番所が残され、重要文化財に指定されているが、ここに向かう途中だったのかもしれない。本館の竣工とともに、現在地に移築されたという。

評釈

先行作品は「歌稿〔B〕」の238。下書稿(一)は「歌稿〔B〕」に書き入れたもの。無罫詩稿用紙に書かれた下書稿(二)（タイトルは「樹園」。藍インクで㊦）の二種が現存。鉛筆と藍インクで手入れが施されるが、藍インクによるものは不完全だとして『新校本全集』では鉛筆手入れを本文として採用している。

「歌稿〔B〕」の238は次のとおり。

238 しめやかに

木の芽ほぐるゝたそがれを

独逸冠詞のうた嘆きくる。

㊦稿は第二連二行目の「守衛長」で途切れているため、『新校本全集』の本文としては採用されていないが、現存稿の中では最終形態である。「守衛長」の後には、おそらく「歯痛起れば」といった文字が入ったのだと思われる。

① 髪白き山田博士が

書いだき帰り往くころ

かはたれはしづに這ひ来て

ふくよかに木の芽ほぐるゝ、

② 鳥飛びて気圧を高め

守衛長

ぎこちなる独逸冠詞を

青々となげく窓あり

さて、ここに登場する山田博士だが、島田隆輔（後掲A、B）は、盛岡高等農林学校教授の山田玄太郎であったのではないかとする。田村寛三「郷土の先人・先覚」²²⁶ 植物病理学の権威者山田玄太郎」（「庄内日報」平成二年八月 <http://www.shonai-nippo.co.jp/square/feature/exploit/exp226.html>）によれば、明治六年に山形県酒田市の名家に生まれ、東北帝国大学農学科（現・北海道大学農学部）を明治三十一年に卒業。盛岡高等農

林学校に奉職し、明治三十六年に農学博士となり、大正四年にドイツ・ボン大学に留学。大正十年には鳥取高等農学校の初代校長となって昭和十一年には北海道大学教授。昭和十八年に没したという。

しかし島田（後掲A、B）は、明治三十七年に大森順造と共同で刊行した『植物病理学』には肩書に農学士とあり、また大正四年十二月の『盛岡高等農林学校一覽』にも農学士とあることから、博士となったのは大正五年以降だろうという。

さらに島田（後掲A、B）によれば、大正四年の「校友会報29」に「予テ欧米へ留学中ナリシ山田教授ニハ十月十一日帰校セラレタリ」の記事があるという。大正五年十二月と大正七年二月の『盛岡高等農林学校一覽』にも名前が載っていることから、留学したのは大正四年までだろうという。つまり、賢治は帰国直後の山田に接したということになる。

ただ「山田博士」のモデルが山田玄太郎ではなかった可能性も考えておくべきだろう。

一つには、まだ山田が学士だったのに「博士」としていることだが、これは記憶違いだったとして済ませることもできよう。そして「髪白き」である。山田は明治六年生まれなので、大正四年には四十二歳。作家の司馬遼太郎は、直木賞を取った三十六歳の時には、もう白髪だったというが、四十代初めに「髪白き」状況となり、そう書かれる例はあまりないように思う（若

白髪が数本くらいはあったとしても）。田村があげている山田の写真は帽子を着用しているために白髪かどうかは判断できず、また、ヤフーオークションに若かりし日（明治三十一年、二十五歳）の山田が制服姿で撮った写真を見つけることができたが、四十二歳で白髪となる兆候は確認できない。

さらに「山田博士」が初めて登場するのが下書稿(二)に藍インクで手入れをしている時で、「守衛長」と同時であることだ。賢治の文語詩が推敲と共に虚構化が進むことを考えると、この段階になって新しく登場する人物が実在の人物である可能性は、あまり高くないように思う。

以上の三点から、山田モデル説を全否定はしないまでも、架空の人物であった可能性は、かなり高いように思う。

ところで「歌稿〔B〕」の「大正四年四月より」の項の最初の紙葉の冒頭には、赤インクで「◎苺畑の柘植先生」と書かれている。柘植先生とは、盛岡高等農林教授の柘植六郎で、『春と修羅（第一集）』の「習作」に「柘植さん」として登場し、「五十篇」の「著者」のモデルではないか、ともされる人物である（「著者」『五十篇評釈』）。

そして「樹園」の先行作品となった²³⁸の前には「◎見本園の夕暮」とある。見本園とは、盛岡高等農林の敷地内にあった施設で、『新校本全集』によれば、この他に「園」の付くところに植物園、普通作物園、桑園、果樹園、園芸苗園、林木園が

あった。

さらに248の前には「◎果樹園にして手をかなしめる人」とあり、「大正四年四月より」の中の「◎」を付されたメモには、全て「園」がかかわっていたことになる。

また、次の項である「大正五年三月より」でも、276の前には「◎果樹園の白き夕日」があり、何かしら強いこだわりがあったように思われる。

もちろん「◎」のメモ書きの後に書かれた短歌のすべてが文語詩に改作されたわけではないが、大正四年に入学して早々の賢治には「園」への興味、担当教員で言えば、例えば農学科第一部で植物、植物病理、樹病等を扱った山田玄太郎教授、あるいは同じ第一部で園芸、農学大意、農場実習などを扱った柘植六郎教授が気になっていったということなのかもしれない。この二人に関していえば、どちらも留学から帰ったばかりで、しかも著書もあるという教員だったので、素朴に憧れや尊敬があった、短歌に取り込もうという意図があったのかもしれない。

また、「五十篇」の「著者」と本作の関係も気になる所だ。「著者」には先行作品の指摘がなく、先述のように柘植教授をモデルにしたのではないかと思われる作品である。

造園学のテキストに、 おのれが像を百あまり、
著者の原図と銘うちて、 かゝげしことも夢なれやと、

青き夕陽の寒天や、

U字の梨のかなたより、

革の手袋はづしつゝ、

しづにをくびし歩みくる。

先に紹介した「歌稿〔B〕」のメモ書きである「◎苺畑の柘植先生」「◎見本園の夕暮」「◎果樹園にして手をかなしめる人」「◎果樹園の白き夕日」のどれも近い雰囲気があるが、ことに最終行の「しづにをくびし歩みくる」が気になる。というのも、「樹園」の最終形における「かはたれはしづに這ひ来て」と似ているからである。

そう書くと、共通しているのは「しづに」近づいてきているというだけではないか、と思われるかもしれないが、「五十篇」と「一百篇」に、賢治は「対」とでもいうような仕掛けを施しており、タイトルやテーマ、語句などが対になっているように見える作品を置いている。

詳しくは拙論「五十篇」と「一百篇」賢治は「一百篇」を七日で書いたか（『一百篇評釈』）を参照していただきたいが、『春と修羅（第一集）』と『春と修羅（第二集）』の構造の類似について、木村東吉（『五輪峠紀行詩群』と『岩手軽便鉄道の一月』『春と修羅』（第一集）との対称性に注目して）『宮沢賢治《春と修羅（第二集）》研究 その動態の解明』溪水社 平成十二年二月）が指摘しており、また天沢退二郎（『詩と童話のはじまり』『宮沢賢治の世界』日本放送出版協会 昭

和六十二年一月)も、『春と修羅(第一集)』の冒頭に「郵便脚夫」が登場し、『注文の多い料理店』でも、やはり郵便に関わる「おかしなはがき」が冒頭に登場することを指摘しており、賢治がこうした遊び、もしくはサブリミナル的、ルーティーン的、神秘主義的な効果を期待しての仕掛けをここでも施そうとした可能性は十分にあるように思われる。

未定稿ではあるが、「五十篇」か「一百篇」に組み入れるつもりで①まで付けた詩である。「対」について、以前に書いた論考では未定稿を度外視してしまっていたが、今後は注意しながら読み進めていきたいと思う。

先行研究

森莊巳池「賢治の短歌」(『宮沢賢治の肖像』津軽書房 昭和

四十九年十月)

原子朗「宮沢賢治 詩歌の魅力」(『国文学 解釈と鑑賞 60 -

9』至文堂 平成七年九月)

島田隆輔A「文語詩未定稿「樹園」 訳注・稿」(『論攷宮沢賢

治 11』中四国宮沢賢治研究会 平成二十五年十一月)

島田隆輔B「樹園」(『文語詩稿』未定稿の研究／無野用紙

詩群篇・訳注(稿) 遺稿2・4番」(未発表) 平成二十

九年六月)

9 隅田川

水はよどみて日はけぶり

桜は青き 夢の列

汝は酔い痴れてうちおどる

泥洲の上に うちおどる

母をはるけき なが弟子は

酔はずさびしく そらを見る

その芦生への 芦に立ち

ましろきそらを ひとり見る

大意

水がよどんで日もうつすらとけぶっているが

桜は青々と夢のようにならんている

あなたは酔って踊っている

泥の洲の上で踊っている

母なる故郷を遠く離れた あなたの弟子は

酔うこともなくさびしく 空を見ている

泥の洲の芦が生えたあたりの 芦の上に立って

真つ白な空を ひとりで見ている

モチーフ

大正十年四月、賢治は保阪嘉内と盛岡高等農林学校時代の恩師・関豊太郎を訪ねたようで、連れだつて荒川土手に桜を見に行った時に作った短歌を文語詩にしたもの。「なが弟子」が賢治を指すか、保阪を指すかの議論があるが、むしろ恩師が「汝」と呼ばれてしまうことが重要であり、本作は桜の名所で酔いしれて踊ってしまう恩師の酔態を描くことがメインであったように思われる。

語注

隅田川 甲武信岳に発する荒川の下流部。ただし昭和初年に荒川放水路が本流となつて分流の扱いとなつた。賢治が訪ねた折は、荒川放水路への付け替え工事の最中であつた。

汝 元・盛岡高等農林学校教授の関豊太郎であろう。気難しく「ライオン」と綽名されて怖れられていたが、賢治はうまく話ができたようで、得業論文の指導教員、研究生時代には共に土性調査に携わっている。関は盛岡高等農林学校を大正九年に辞めて農商務省農事試験場の嘱託となり、試験場の近く（北豊島郡滝野川町大字西ヶ原）に住んでいたという。「大正十一年のことだと思ふが、宮沢氏は木綿袴をつけ朴木齒の

下駄をはき、突然と試験場へ来訪されたので、四方山話で退庁時間となつたから、自宅へ伴ひ話の続きを進行させた」（関豊太郎「宮沢賢治氏に対する追想」『宮沢賢治研究』筑摩書房 昭和三十三年八月）とのこと。また、奥田弘「関豊太郎教授賢治訪問のこと」（『宮沢賢治研究資料探索』蒼丘書林 平成十三年十月）によると、関の長女・三木綾子は「下の妹が大変よく憶えていてくれました、よく父を訪ねて見ると、自分がいつも取つぎに出、父はいつも機嫌よく迎えては夕めしを食べて行く様について精進料理を父が申し付けたといつておりました。何故に肉やお魚はたべないのかと思つていたとのことです。あの気むずかしい父が、気があつたのかよく話をして長い時間一緒だったとのことです」とのこと。また、関の妻は「大正十年ごろ、二度ほど白衣の僧形で、西ヶ原宅に見えた」と語っていたという。

泥洲 造成中の荒川放水路の泥でできた洲のこと。宮沢俊司（後掲A、C）は、「でいす」とするが、『宮沢賢治コレクション10』では「どろす」としている。浜垣誠司（宮沢賢治の詩の世界 <http://www.ihatov.cc/song/>）は、「泥洲」という言葉が、「泥酔」というイメージを喚起せずにはおきません」とも書いていることもあり、ここでは「でいす」と読んでおくことにしたい。

評釈

「歌稿〔B〕」の810・811を文語詩に改作したもの。「歌稿〔B〕」に書き込まれた下書稿(一)、無罪詩稿用紙に書かれた下書稿(二)(タイトルは「隅田川」。赤インクで㊦)の二種が現存。

先行する短歌は「大正十年四月」の項に書かれているが、大正十年と言えば、花巻で家業の店番をしていた時、背中に日蓮の御書が落ちてきたということをしつかけに家出上京した時期である。賢治は前年十二月に入会した国柱会を訪ねるもの門前払いされ、本郷でガリ版切りのアルバイトをしながら下宿生活を送っていた。

「歌稿〔B〕」をみると、この頃、しばらく歌作が途絶えていたようだが、大正十年四月に政次郎が上京中の賢治を訪ね、一緒に関西に旅行に行った時から作歌を再開させ、四十首ほどを並べると、その次に「東京。」のタイトルのもとに805から811までの七首を書いている(その後にも三首書かれているが、東京との関係はなさそう)。原稿には、この七首が赤インクで括られ、810・811は藍インクで×が付され、赤インクで転ともある。

また、昭和三年から五年頃に書かれた「東京」ノートの一八九二一年一月より八月に至るうち／大正十年」とある項にも805から811までの七首が、文語詩への中間的とも思われる文体に改められて書かれている。下書稿ではないが、関連作品と

するべきかもしれない。

805 エナメルのそらにまくろきうでをささげ、花を垂るる
は桜かあやし。

806 青木青木はるか千住の白きそらをになひて雨にうちど
よむかも。

807 かぐやきのあめにしばらくちるさくらいづちのくにの
けしきとや見ん。

808 ここはまた一むれの墓を被ひつゝ梢暗みどよむときは
ぎのもり。

809 咲きそめしそめあよしのの梢をたかみひかりまばゆく
翔ける雲かな

810 雲ひくく 桜は青き夢の列。 汝は酔ひしれて泥洲にを
どり。

811 汝が弟子は酔はずさびしく芦原にましろきそらをなが
めたつかも

805の短歌は、雨の中に黒々とした桜の枝が伸びているとい
うだけのものだが、桜という植物の持つ妖しいエロスを描いて
おり、かつて「五十篇」の「風桜」の先行作品ではないかと指
摘したものである(『五十篇評釈』)。その当否はともかく、
桜について「いづちのくにのけしきとや見ん」「青き夢の列」

などとされるのは、ただの観桜の歌ではない。

もつとも賢治は「或る農学生の日誌」で、「ぼくは桜の花はあんまり好きでない。朝日にすかされたのを木の下から見ると何だか蛙の卵のやうな気がする。それにすぐ古くさい歌やなんか思ひ出すしまった歌など詠むのろのろしたやうな昔の人を考へるからどうもいやだ」と主人公に託して書いていることから、敢えて「のろのろ」していないやうな言辞を使ったのかもしれない。

さて、舞台となったのは、宮沢俊司（後掲A、B、C、D）が丹念に調べているように、東京・荒川堤にあった桜並木であろう。賢治は農事試験場に勤務していた関を訪ね、そのまま桜を見に出かけたのだと思われる。あるいは、桜を見るために、事前に打ち合わせた上で訪問したのかもしれない。

当時、荒川から向島にかけての堤は桜で有名であり、宮沢俊司によれば「埼玉県境の鹿浜から枕橋まで一四・八kmの大部分が桜並木」で、「大正五年の記録によると荒川堤の桜が一九三〇本、向島堤の桜が一七〇〇本とあり、一日ではとても見物できない長さ」（後掲A）だったという。

しかし明治四十年、四十三年に荒川の堤防が決壊し、放水路を作ることとなったために千数百本が伐採され、昭和初期には大気汚染によって枯れるものが多く、第二次大戦後は薪にされたために絶滅してしまったらしい。

賢治たちが桜を見に行った日については、杉浦静（「文語詩」「われはダルケを名乗れるものと」の生成 宮沢賢治とダルケ（2）」「言語文化34」明治学院大学言語文化研究所平成二十九年三月）が、短歌に「咲きそめしそめよしの」とあり、また気象庁の降雨に関するデータなどを参照した結果、大正十年の四月八日（金曜日）あたりが候補だったのではないかとする。

が、宮沢俊司（後掲D）は、八日であれば、政次郎との関西への旅から、まだ戻っていない可能性もあり、また、「花を垂るるは桜かあやし」「かざやきのあめにしばらくちるさくら」「桜は青き夢の列」など、既に桜が咲き初めではない状況を詠んだと思われる言葉もあることから、「咲きそめし」とあるのは「そめるよしの」の語呂合わせではないかとする。実際に訪れたのは雨の記録のある十二日（火曜日）だったのではないかとするが、妥当な見解であると思う。

さて、桜を見に出かけた関と、その二人の弟子だが、文語詩で「なが弟子」とあるのは、宮沢俊司（後掲A、B、C、D）によれば、盛岡高等農林学校時代の賢治の親友で、同人誌「アザリア」にも関わっていた保阪嘉内ではないかとし、それは最終形態には残っていないが、下書稿の手入れ段階に「甲斐より来たる」とあったためだという。嘉内は山梨県の出身だ。

「なが弟子」にあたるのは賢治なのではないかという異論も

あるが、宮沢俊司（後掲D）は、嘉内が残した日記を参照し、そこには大正十年四月十二日の記録として「陽は柳にも／ランカンにも／限りなく温かくふりそぐ桜の花は散る夕べ」とあるだけでなく、山梨に住んでいたはずの嘉内が、四月十日には銀座の記録もあったことから、上京して、賢治に会い、この日に、ともに桜を見に行ったのではないかとしている（ただし年譜には記載がなく、嘉内の日記にも賢治と会ったという記述はないという）。

事実としては嘉内と賢治が会った可能性が高いように思うものの、文語詩に登場する「なが弟子」が、果たして嘉内を指していたかどうかについては別問題であると思う。

と言うのは、『新校本全集』によれば、下書稿(二)に「甲斐より来たる」とあったのが、手入れて「奥に生れし」「奥野に生れし」「越路に生れし」「都ならはぬ」などという句に変わり、最終的に「母をはるけき」に落ち着いているからである。宮沢俊司（後掲A、C、D）は、「母をはるけき」を嘉内の母が大正七年に亡くなっていることを指すのだとするが、三年もたてば、母の死の悲しみからも、だいぶ癒えているだろうし、その途中で「奥野」や「越路」、「都ならはぬ」と書いていたことについての説明ができない。

また、宮沢俊司（後掲D）は、この頃、賢治は嘉内に向かつてかなり執拗に国柱会への勧誘を行っており、「嘉内は距離を

置いて対しているように思われます。敏感な賢治は「桜は青き夢の列」と心が通わない寂しい状況に陥って戸惑っている様子です」とし、だから「なが弟子」（＝嘉内）は、さびしそうにしているのだとする。

さらに「弟子」は三人称なので賢治自身ではありません。もし賢治自身であるなら「汝が弟子我は」など一人称の表現にするはずです」（後掲D）とも書くのだが、文語詩では賢治自身の経験を三人称にして書くことはよくあることで、だからと言って「嘉内ではない」ということにはならないにしても、嘉内であっても、他の誰でも、もちろん賢治自身であっても当てはまるような存在として書かれているように思うのである。

それよりも気になるのは「汝」だ。

もちろん、これは関のことを指すのであろうが、恩師に対して「汝」という二人称を使うとは、どういうことだろうか？

日本語学者の金井勇人（「失礼さという観点から見た二人称指示の体系」『早稲田大学大学院文学研究科紀要48』早稲田大学大学院文学研究科平成十四年）によれば「人称代名詞による二人称指示は、二人称への失礼さを伴うことがある」という。

金井は新田次郎の小説『孤高の人』（新潮社昭和四十四年）から、教師である影村が、生徒から「あなた」と呼ばれる件りを引用する。

「いったい、あなたはなぜ私にそんなことを訊ねるんです」「あなただと？」

影村はむっとしたような顔でいった。先生といわずにあなたといったことが影村には不愉快に思えたにちがいない。

小説のモデルとなっているのは登山家の加藤文太郎で明治三十八年の生まれ。直接取材したわけではないだろうが明治四十五年生まれの新田次郎も、明治二十九年生まれの賢治も、出身地こそ神戸、諏訪、花巻と異なるものの、言語感覚にあまり変わりはないように思う。

そもそも日本語における二人称は、例えば「貴様」「手前」「御前」というように、どれだけ敬意を込めようにも罵り言葉にしかならないという不思議な性格を持っており、「貴方」や「御前」などの言葉が、ごく親しい関係にある時だけ成り立つ。つまり、賢治が関に向かって、あなた呼ばわりしたということは、恩師を突き放し、内面に軽侮の心を抱いていた、ということの意味しているのだと思われる。

では、なぜ恩師を「汝」などと呼んだのかといえ、**「汝は酔い痴れてうちおどる」**からだろう。そして「**なが弟子**」は、呆気に取られて茫然と立ちすくむだけだった、ということだと**思う**。浜垣誠司(宮沢賢治の詩の世界 <http://www.inatorv.co/>)

song)は「泥洲で変な踊りに興ずる酔っぱらい、そしてそれをしらけて眺める青年…」とするが、その通りだろう。

「未定稿」の「**「痩せて青めるなが頬は」**」に「青柳先生」のことを「**な**」と呼んでいる例はあるが、下書段階では「師」としており、島田隆輔(「**痩せて青めるなが頬は**」)「**《文語詩稿》未定稿の研究／無罣用紙詩群篇・訳注(稿)** 遺稿2・4番」(「未発表」平成二十九年六月)も、この改変について「**愛のなかにも親近感にもじませる**」としているように、二人の年齢差が七年しかなかったことも影響しているのだろう。一方、関の場合は、歌稿から下書段階までずっと「**汝**」のままであり、年齢も三十歳ほど離れている。

もし本作が、教授の醜態を描くのがテーマであったとすれば、「**なが弟子**」は嘉内であっても、賢治であっても、その他の誰かであつてもかまわない、というわけである。

賢治としては、どういう出身地の人物、どういう名前の人物ならばイメージや音韻が似つかわしいかということだけに注力していたわけで、だからこそ「**奥に生れし**」「**越路に生れし**」「**都ならはぬ**」…といった案が書かれたのであろう。

この仮説が成り立つならば、本作に①が付せられながら、定稿にまで至らなかつた理由は容易に想像できる。「**五十篇**」には、既に関の酔態を描いた「**夜はま青き藪むしろに**」や「**冬の宿**」があつたからだ。また「**一百篇**」にも、土性調査に赴い

た際の関の醜態を描こうとした「早池峯山巔」があり（下書の途中で、人事ではなく自然を描く詩に改変されている）、そこには本作における「なが弟子」をも思わせる「政客とその弟子」というタイトル案も書かれていた。

ところで文語詩の解釈とは別にして、賢治や嘉内が大正十年四月の花見の話をどこにも書いてないのは気になるところだ。

賢治と保阪は大正十年に決別したとされていたが、それは『宮沢賢治 友への手紙』（筑摩書房 昭和四十三年六月）の編集段階で、保阪の長男である庸夫が「山場を作りたかった」ための演出であったことが明らかになっている（栗原敦「資料と研究・ところどころ」②「時期推定書簡存疑」（『新校本宮沢賢治全集』書簡集編集作業から）のうち）。「賢治研究130」宮沢賢治研究会 平成二十八年十一月）。大明敦（「保阪嘉内の生涯」『心友 宮沢賢治と保阪嘉内 花園農村の理想をかかげて』山梨ふるさと文庫 平成十九年九月）によれば、保阪は、この頃、父と対立しており、何度も家を出ようとしていたらしいが、「お父様や弟さんを棄てるなどは私ならば致しません。全体そんな事はいけません。私の今の場合は一時の変通です」（大正十年一月三十日）と、家出上京して間もない賢治から書き送られるような有り様であった。

興味を惹かれることは多いが、本稿で論じる範囲をはるかに越えてしまっている。新資料の発掘が待たれるところだ。

先行研究

小野隆祥「序論」（『宮沢賢治 冬の青春 歌稿と「冬のスケッチ」探求』洋々社 総和五十七年十二月）

宮沢俊司A「隅田川」（『宮沢賢治 文語詩の森 第二集』柏プラーノ 平成十二年九月）

宮沢俊司B「文語詩「隅田川」と荒川堤」（『賢治研究84』宮沢賢治研究会 平成十三年四月）

宮沢俊司C「宮沢賢治 短歌「東京」七首と荒川堤」（「あらかわ学会年次大会2001 講演論文集」あらかわ学会事務局 平成十三年十月）

大角修「桜は青き夢の列」（『「宮沢賢治」の誕生』河出書房新社 平成二十二年五月）

小林俊子「詩歌」（『宮沢賢治 絶唱 かなしみとさびしさ』勉誠出版 平成二十三年八月）

宮沢俊司D「ワシントンの桜と賢治そして嘉内」（『賢治研究132』宮沢賢治研究会 平成二十九年七月）

10 八戸

さやかなる夏の衣して

ひとびとは汽車を待てども
疾みはてしわれはさびしく
琥珀もて客を待つめり

この駅はきりぎしにして
玻璃の窓海景を盛り
幾条の遥けき青や
岬にはあがる白波

南なるかの野の町に
歌ひめとなるならばしの
かゞやける唇や頬
われとても昨日はありにき

かのひとになべてを捧げ
かゞやかに四年を経しに
わが胸はにわかにも重く
病葉と髪は散りにき

モートルの爆音高く
窓過ぐる黒き船あり
ひらめきて鷗はとび交い



鮫駅

岩波はまたしもあがる

そのかみもうなぬなりし日
こゝにして琥珀うりしを
あゝいまはうなぬとなりて
かの人に行かんすべなし

大意

さつぱりとした夏服を着て
人々は汽車を待つているけれど
肺病の症状も進んだ自分はさびしく
琥珀を売るために客を待つのみである

この駅は岸壁の上にあつて
ガラス窓からは海の景色が見えて
幾筋にも異なつた青が彼方にまで広がり
岬には波が白く砕けている

南にあるかの野の町に

「歌ひめ」となる習わしのために送られたが
輝かしい唇や頬が
私にもつい先日まではあつただ



蕪島のウミネコ

あの人にすべてを捧げ
輝かしい四年の歳月を経たが
自分の肺病が急に起こったため
髪も散ってしまった

モーターの爆音も高く
窓下を黒い船が過ぎ
鷗は空を飛び交って

岩には波しぶきがまた上がっている

まだ少女であった日にも

ここで琥珀を売っていたが

ああ今は少女に戻って

あの人に会いに行く方法もない

モチーフ

花巻近隣の遊廓では青森出身の者が多く、八戸に赴いた際、それを思い浮かべながら「歌ひめ」の詩篇を書いたのであろう。しかし、舞台とした鮫駅やその周辺は八戸遊廓の一部であった。八戸で「歌ひめ」の詩を書いたきっかけは、むしろ、そちらにあったのかもしれない。

語注

琥珀 地質時代のマツやスギ、ヒノキなどの樹脂が地中で化石化したもの。賢治は多くの作品に登場させている。岩手県久慈市は国内最大の産地。当初は貝を売る設定だったが、手入れの段階で琥珀に置き換えられている。しかし、中川真平（後掲）が土地の年配者に尋ねてみたところ「鮫で貝が売られることはあっても琥珀が売られていたことはない」と語っていたとのこと。

この駅はきりぎしにして 「文語詩篇」ノート」の「31 1926 八月」に「鮫駅 海光ノ中ニテ物思ヘル女」とあることから、八戸線の鮫駅が舞台となっていることがわかる。ただし、現在の鮫駅は、埋立のため「きりぎし」には立っていない。

鷗 『新校本全集』の年譜によれば、賢治たちは蕪島のウミネコ繁殖地を見に行ったようである。ここには蕪嶋神社があり、弁財天の使いであり、漁場を教えてくれる鳥であるウミネコが保護されており、一大サンクチュアリとなつて、大正十一年には天然記念物に指定されていた。ここには「鷗」とあるが、ウミネコも同属同科の鳥。ウミネコの方がやや大きく、クチバシの色や形、足の色、鳴き声などが異なっているが、ここではウミネコのつもりで書いているのだろう（音数の関係か？）。中川（後掲）によれば、宮沢清六の談話として、

賢治はこの時のウミネコの印象が強く残っており、家族に向かつて何度も話したという。和田千蔵「蕪島に於けるウミネコの「渡り」の時季」（「鳥7・33・34」日本鳥学会昭和七年五月）によれば、一九二六年にウミネコが渡来したのは三月十五日で渡去したのは九月三日。一九二二年のように八月三日に渡去してしまう年もあったという。

評釈

無罪詩稿用紙に書かれた下書稿が現存（タイトルは「海光」。手入力で「琥珀うる女」「琥珀うる娘」「九戸郡」「八戸」。右肩に赤インクで㊦）。現存稿は一種のみ。

『新校本全集』の年譜によれば、賢治は大正十五年八月、妹シゲと、その息子・純蔵、末妹クニの四人で八戸へ旅行にでかけた。その際に「鮫駅 海光ノ中ニテ物思ヘル女」を見たことが「文語詩篇」ノート」の「31.1926 八月」に記されるが、削除されていることから、本作に文語詩化されたことがわかる。八戸から「南なるかの野の町に」、「歌ひめ」として送られた女性が、肺病のために故郷に戻され、鮫駅で琥珀売りをしているというものだが、二人の妹に加えて、まだ生まれて一年八ヶ月の甥っ子を連れての旅の最中に、賢治が駅頭で身の上話を聞いたとは考えにくい。物売りをしていた女性を見ての虚構だろう。「一百篇」の「（燈を紅き町の家より）」には「（うみ

べより売られしその子）」とあり、イメージに共通するところがあることから、その時の経験が生かされたのかもしれない。花巻近辺には、八戸あたりからやってきた女性が多かったように、賢治の家の近くの遊廓街・東町（通称・裏町）の老舗蕎麦屋・嘉治屋の主人だった佐々木喜多郎は「芸者や酌婦には八戸（青森）出身者が多かった。親の心情としてあまり近いところでは気まずいし、かといって遠すぎるのは不憫だったのでしよう」とあり、また日出楼茶屋の元・女将の手記にも「娼妓は八戸出身者が多かった」と書かれているという（泉沢善雄「賢治周辺の聞き書き 第十話 三人の先生への追悼 賢治エピソード 落穂拾い（7）」「ワルトワラワラ27」ワルトワラの会 平成二十年五月）。遊廓ではないが、花巻の精養軒で給仕をしていた小野キヨ（藤原嘉藤治夫人）も、青森県十二里村（現・南津軽郡藤崎町）の出身であった。青森県出身の女性たちに関するイメージは、こうして培われていったのだろう。

また、この「歌ひめ」が胸を患っているというのも気になるところだ。宮城一男（後掲A、B）は、「賢治の化身でもあるようだ」とし、胸の病を患いながらセールスマンとして肥料を売り歩いてきた経験と重ね合わせている。

ところで、細かい話に思われるかもしれないが、賢治の八戸紀行については気になる点がある。佐藤隆房（「八戸海岸」『私家版 宮沢賢治』桜地人会 平成八年三月。初出は昭和十七年）、

『新校本全集』の年譜、宮城（後掲A、B）が、それぞれ妹のシゲ・クニからの聞き書きを元に書いているが、矛盾する点があるからだ。中川真平（後掲）は、それを整理しようとしているが、それにも問題があるように思われる。まず、佐藤隆房の記述から見てみたい。

ある夏、賢治さんは二人の妹を連れて八戸に遊びに行きました。白金という海辺の、中島屋という宿に着きました。

「お気の毒ですが、お客様がいつぱいで空いた部屋もなく、申し訳も御座いませんが……」と宿のおかみさんは、余り立派でない麻の詰襟服に、無造作に麦藁帽子をかぶった書生くさいかっこうの賢治さんをしげしげと見ながら言いました。賢治さんは困ったような顔をして

「いやあ、何とか都合して泊めていただけませんか？」

「三階の悪いところですがまんして下さるんですしたら」

「いや、どこでもかまいませんからひとつお願いします」

賢治さんはむやみに喜んだり、やたらに恐縮したりしませんでした。

三階といえれば体裁はいいが、案内されてみると屋根裏で、天井も何もない物置きです。賢治さんは、そんな事には頓着なく、すぐさま窓辺にとりつくくと、目の下に広がる太平洋の怒涛と、そこに聞こえる潮騒に心を奪われてしまいました。

（略）

初めからあまりいいお客だとは思わなかったらしい宿屋では

「どうぞいつぱい召し上がって下さい」などと御飯は置きっぱなしにして行きます。入浴の知らせにも来ません。しかしそんなことには一向頓着せず、毎日見物に日を暮らし三晩泊まりました。

いざ帰るといふ時になって、勘定書を取りよせると、最初から安宿りに扱ったのでしよう、随分安い宿料です。賢治さんは、その安い宿料といっしょに、お茶代を五円包みました。

当てにしていけないお客からの当てにしていなかった沢山のお茶代に、びっくりしたのは宿のおかみさんです。早速、鯨の鬚の楊枝だの手拭いだの、こまごましたものを山と持ってきて来て、少しきまり悪そうに

「どうもとんだお粗末な部屋にお入れ申して、ほんとうにすみませんでした。それにお茶代を沢山いただいて申し訳のうございます。今度お出での時はいっしょけんめいお取り持ちしますから、どうかまたいらっしやって下さいまし。お妹さん方もどうぞね」

急に改まった、ていねいな挨拶に、賢治さんは固くなってしまいました。

「はあ長々どうも大変お世話になりました」とおじぎを二度

も二度もやっております。

生真面目な兄の平素を知っている妹たちも、とうとうクスクスと笑ってしまいました。

宿帳には小さく「盛岡高等農林助手」と書かれてありました。

〔一九一八年頃〕

続いて『新校本全集』の年譜の一九二六（大正十五）年八月の記述を見てみたい。これは『校本全集』の内容とほとんど変わらないが、年譜の担当者であった堀尾青史の聞き書きに基づくものである。

この月、妹シゲ、その長男純蔵、末妹クニをつれ、八戸方面へ小旅行を試みる。くたびれた白い麻の服を着、幼な子をあやしたり抱いたり、車窓を過ぎる風景を説明しながら八戸、鮫駅着、陸奥館に入る。服装から察していいお客と見られず、二階の少し粗末な一室に通され、宿帳に「教師」と書く。夜の食膳ではウニに卵をからませた「カゼ」という料理がおいしかった。

翌日は種差海岸へいく。大岩に烈しく波が打ち寄せ、浜の草原には立派な馬が駆けた。岩の上で釣りをする人があり、一時間ほどして見るといつのまにか潮が満ちて、岩は海中に

没しそうになりながら、それでもまだ釣っているのがあった。夕方、陸奥館に帰るとお茶代が利いたのか部屋がかえられていた。

三日目、朝早く砂浜に出ると漁師のおばさんが、海でとったばかりの大きなアワビを六、七個持っており、頼むと五〇銭でわけてくれたので安いのに驚く。今日は舟を頼んでウミネコの繁殖地蕪島を見にゆくのである。屈強の男がふたり舟をこいで島へのりつけて上る。一面雑草の中に数知れぬウミネコがおり、春やつてきて産卵し生まれたヒナたちを加えて何千羽かわからない。男たちが雑草を根こそぎぬいて放りなげると、休んでいた鳥たちは一斉に舞い上がりミュウミュウと空をまっ暗に覆ってとびまわった。やがて騒ぎがおさまり、再び舟にのって帰る。あす、また別のところへ行こうかと相談したが、妹たち、特にシゲは子どもをかかえ、おみやげのアワビの鮮度も心配なので帰ることにする。宿の勘定は気前よくはずみ、宿では玄関先でお盆にいろいろのお返し物をさし出した。その中には鯨のひげで作った小楊子などもあった。賢治はていねいに礼を言ってお出る。

異なるのは大正七年か大正十五年か。妹二人と行ったのか、純蔵もいたのか。宿の名前。白金（正しくは白銀）か鮫か。二階か三階か。二泊か三泊か。茶代の多さに宿の人が気付いたの

がいつだったか… 等々である。

しかし、宮城（後掲A、B。引用はB）の聞き書きを加えると、さらに問題が増えてくる。

羅須地人協会が設立された大正十五年の夏、賢治は、「忙中閑あり」とばかり、妹さん達を連れてノンビリとした旅行を愉しんだ。

「オイ、海水浴に連れて行ってやろう。」

そもそも、これが、八戸行の出発前の賢治のセリフだったという。故宮沢シゲ氏（賢治の実妹）は、そのとき、大正十三年十一月生まれの、一年八ヶ月になった長男を背におぶって出発した。

（略）

尻内駅（現八戸駅）で八戸線にのりかえ、賢治一行は、湊駅（現むつ湊駅）に降りたつ。その当時、八戸線は、すでに鮫まで開通していたが、終点の一つ手前で降りたわけである、なぜかといえ、湊駅のほど近くに、その日の宿がとつてあったからである。

「兄は、一、三回手紙を往復して、宿を予約したようでした。」その旅館名はさだかでないが、「宿のすぐ近くに、湧き水があった。」というシゲ氏の証言で、おそらく「三島館」だったとおもわれる。そのすぐ近くに、有名な「三島湧水」が

あったからである。

「兄は珍しがって、何度も何度も、湧き水をみに行っていたよ
うでした。その洗濯の風俗も面白がっていました。」

（略）

さて、賢治一行は、翌日、翌々日と、当時の八戸海岸。白銀海水浴場で水泳を愉しんだり、ウミネコの繁殖地・蕪島を舟でまわったり、漁師から大きなアワビを分けてもらったり、そして、種差海岸まで遠出をしたり、夏の休日を満喫して帰途につく。

その帰りは鮫駅から乗車したという。のちに、「この駅はきりぎし（切岸）にして」とうたわれたように、当時の鮫駅は、海にのぞむ断崖のふちにあった。

ここでは降りた駅が異なっており、湧水の記述もある。また、三階に案内されて応対が悪かった話は出てきていない。予約なしに泊まるうとしたことが悪い部屋に通された理由であったが、ここでは手紙を往復させて宿を取ったとある。宮城は別の本で（後掲A）、泊まった宿について「白銀町内にあったことだけはたしかであるが、「中野屋」ともいい、陸奥館（シゲさんの記憶）ともいい、旅館名はさだかではない」としている。白銀駅は、陸奥湊駅と鮫駅の間にあるが、昭和九年開業なので

賢治は知らない。また、白銀町内に泊まったとすると、湊駅からは一・五キロほど離れることになり、「湊駅のほど近くに、その日の宿がとってあった」と矛盾してしまう（鮫駅から白銀までも約一・五キロ）。

中川（後掲）は、「妹たちの証言の断片を総合し、現地の地理状況に照らしあわせると、おそらくは景勝地、鮫の海に面して建っていた石田屋という宿ではないかと推測される」とし、石田屋の四代目主人で、詩人でもあった村次郎の述懐から「石田屋も中三階であり、また、石田屋独自の鯨のおみやげをもらっていることや、お金のあまりなさそうな客は布団部屋に通して格安にするという石田屋伝統の客扱いをされていること、そして思い起こせば自身自身小学校時代に賢治を宿で見かけた記憶がすると話している」とし、さらに賢治たちがおみやげにした鮑は白銀では取れないこと、湧水は白銀以外にもあったこと、宿の眼下に太平洋を見ることができたのは石田屋だと思われることなどから、石田屋説を強く主張するに至っている。

ただ、村次郎（「村次郎先生と係わりのあった文学者達」『村次郎先生のお話』朔社 平成十一年十月）の語るところを確かめてみると賢治たちが「鯨の鬚で作った煙草入れ」を貰って、「鮫では石田家よりこの鬚加工品は作っていない」としているが、妹たちの回想に出てくるのは「楊子」や「小楊子」であって「加工品」というほどのものではない。また「俺の小

学生時代で、後に、賢治の写真を見て、見た覚えがあると思つた」とするのだが、いくら記憶力があつたにしても、有名人であつたわけでもない賢治の姿を、小学校時代以来、ずっと覚えていたというのは、なかなか信じにくいように思われる。しかし、そうであつたにしても地元の地理や歴史をよく知る人物による石田屋説には説得力があるように思う。

しかし①佐藤が一九一八（大正七）年頃の記録だとしている点、②宮城が、賢治一行が湊駅で降りたと書いている点、③白銀町内であつたことは確かだとしている点、④旅館を予約をしていたという点については、特に説明もなしに無視してしまつており、問題であろうと思う。

もちろん人間の記憶であるから、旅館の名前がそれぞれ違つたり、宿帳に「盛岡高等農林助手」と書いたか「教師」と書いたかなどは誤差の範囲内だろう。記録者の思い込みや思い違いもあつたかもしれない。しかし、もしも賢治と妹たちが、八戸に二回行ったことがあるのだとしたら、これらの混乱も、ある程度整理できるのではないだろうか。

賢治と妹たちが八戸に行ったのは、『新校本全集』の年譜によれば一回きりであるが、佐藤が書いているように、大正七年の夏、つまり賢治が盛岡高等農林に研究生として残り、土性調査のために山野を歩き回っていた頃ならば、日程的に可能である。姉のシゲはこの時十七歳でクニは小学生で十一歳。しかし

二十一歳の兄が同道していたなら問題はないだろう。二年後の大正九年九月には、シゲとクニを誘って岩手山に登っているので、ふいに二人を海水浴に誘うというようなことも、あつてもよさそうだ。

八戸線は、明治二十七年に東北本線の尻内駅（現・八戸駅）から八戸駅（現・本八戸駅）まで、東北本線の支線として開業している。同年中に湊駅まで延伸されているので、大正七年に湊駅まで鉄道で行くことができた。宮城（後掲A、B）は大正十五年の夏に八戸に行ったとして、「賢治一行は、湊駅（現むつ湊駅）に降りたつ。その当時、八戸線は、すでに鮫まで開通していたが、終点の一つ手前で降りた」としていたが（鮫駅が終点だったことは一度もないので、この点は誤りである）、もし、これが大正七年の記憶であつたとすれば、当時の終点であつた湊駅で降りたのは納得できる。ただ、ここから白銀町までは二キロほどとなり、「湊駅のほど近くに、その日の宿がとつてあつた」とは矛盾する。

大正十五年の夏だつたとすると、大正十三年に八戸線が種市まで伸び、大正十五年七月に新設された陸奥湊駅で降りた可能性がある（八戸線は新井田川の少し上流を通るようにルート変更され、八戸駅（現・本八戸駅）から湊駅に向かう線と種市に向かう線に分かれることになった。したがって大正十五年にも終点の湊駅で降りた可能性はある）。それならば宮城の書く通

り、鮫駅の一つ手前の陸奥湊駅で降り、白銀町に泊まったとも考えられる。が、やはり「湊駅のほど近くに（この場合は陸奥湊駅だということになる）」とは矛盾する。

しかし妹たちと八戸に行ったことが二度あつたとすれば、どこに泊まったか、どの駅で降りたかについての曖昧さは残るにしても、宿の予約をしてから行った時と、予約をせずに行つて悪い部屋に通された時があることについての説明もできることになり、未解決だつた①④の問題を、ほぼクリアできることになる。

さて、賢治と妹たちの八戸紀行について、決定的な資料もなのままに長々と検討してきたが、ただ年譜修正の可能性を提案したかつたというわけではない。賢治たちが泊まったと思われる湊駅（あるいは陸奥湊駅）周辺、鮫駅の周辺が、ともに「八戸遊廓」と呼ばれるエリアであつたことを指摘したかつたためである。

昭和五年七月に刊行された『全国遊廓案内』（日本遊覧社）では、「八戸遊廓は隣接町の小中野町及び鮫の遊廓とを以て八戸遊廓と俗に言はれて居るのである。小中野町遊廓に行くには、八戸町の中央で自動車に乗るか（賃二十銭）汽車で「陸奥湊駅」に下車するか。「片道八銭」で湊駅から廓までは約五丁である」とあり、そこには「現在貸座敷約三九軒、娼妓は約百六十人位居」とある。駅名に湊とあることにも明らかのように、この

界限は古くから港として栄え、船乗りたちを相手にした遊廓があつたようだ。

鮫駅の近くにも港があり、古来より船乗りたちを相手にした遊廓があつたようだが、こちらについて『全国遊廓案内』では、あつさり「風光明媚の地として特に親しい情調がある」と書いているのみである。しかし八木沢高明によれば「『小中野の花街』によれば、江戸時代中期の安永年間（一七七二～一七八一）には、小中野に七軒の妓楼があつたのに対して、鮫港には四十三軒もあつたという」（「軍都と色町」http://bunko.shuetsu.co.jp/serial/yagisawa/02_04.html）。

賢治一行が泊まったところがどこであつたのか、どの駅で降りたかもしつきりしない。しかし、現在候補に挙がっているところの、どの駅、どの町であつたにせよ遊廓に近い場所であり、「歌ひめ」を物色しようとする男たちの姿は、妹たちを連れた賢治の目にも、嫌でも入ってきたように思われる。

さすれば鮫駅で琥珀を売っていた女性が、かつて花巻あたりかと思われる「南なるかの野の町」で「歌ひめ」をしていたという本作の設定は、花巻近辺で働いていた女性たちに八戸出身者が多かったということからくる連想だけでなく、八戸でも「歌ひめ」たちの姿を見ていたからだった、ということになるかもしれない。

先行研究

宮城一男 A 「八戸」（『宮沢賢治との旅』津軽書房 昭和五十三年八月）

宮城一男 B 「農民とともに」（『宮沢賢治 石と土への夢』筑

摩書房 昭和五十五年十一月）

菊池亮子 「賢治文語詩紀行 「八戸」 琥珀売る女」（「瓔珞2」

実践近代文学研究会 平成二年七月）

入沢康夫 「騙る主体」（『宮沢賢治 プリオシン海岸からの報

告』筑摩書房 平成三年七月）

栗原敦 「うられしおみなこのうた」 『宮沢賢治 透明な軌道の

上から』新宿書房 平成四年八月）

宮沢健太郎 「『文語詩・未定稿』」（『国文学 解釈と鑑賞 66 1

8』至文堂 平成十三年八月）

中川真平 「八戸」（『宮沢賢治 文語詩の森 第三集』柏プラ

ーノ 平成十四年七月）

天沢退二郎 「詩人、詩篇、そしてデモン 宮沢賢治の文語詩篇

における「売る行為」を読む」（『《宮沢賢治》のさらなる

彼方を求めて』筑摩書房 平成二十一年五月）

小林俊子 「詩歌」（『宮沢賢治 絶唱 かなしみとさびしさ』

勉誠出版 平成二十三年八月）

11 「歳は世紀に會つて見ぬ」

歳は世紀に會つて見ぬ
石竹いろと湿潤を
人は三年のひでりゆゑ
食むべき糧もなしといふ

稲かの青き槍の葉は
多く倒れてまた起たず
六条さては四角なる
麦はかじろく空穂しぬ

このとききみは千万の
人の糧もてかの原に
亜鉛のいらか丹を塗りて
いでゆの町をなすといふ

この代あらば野はもつて
千年の計をなすべきに
徒衣ぜい食のやかららに
賤舞の園を供すとか

大意

今年はこの世紀に入つてからかつて経験したことのない
石竹いろと湿潤さを味わい
人々は三年続いた旱魃のため
食べるべき食糧さえもないという

稲 あ青いとがった穂は
多くは倒れてしまつて起きることがなく
六条あるいは四角形の
麦は白い空穂となつている

こんなとききみは千万の
人々の蓄えた食糧をもとにあの野原に
亜鉛の瓦を赤く塗つて
温泉街を作るのだという

それだけの金をこの野原に使うならば
農民たちの千年分の蓄えにもなろうというのに
無駄に着飾つて贅沢なものばかり食べるような輩たちに
賤しい踊りを見る遊園地を作るのだというのである

モチーフ

昭和二年、賢治は花巻温泉の花壇設計に加わったが、それは「徒食ぜい食のやかららに／賤舞の園を供す」事業に手を貸すことでもあり、自責の念に駆られていたようだが、本作ではストリートに事業家である「きみ」を批判している。本作と先行作品を同じくする「五十篇」の「萎花」では、社会批判が目立たないようにされているのと対照だ。しかし、ストリートな社会批判をしながらも、賢治は昭和二年の農村を襲う可能性のある冷夏の田園風景の美しさを讃える樂觀性をも持っていたように読み取れてしまう。賢治は真に倫理的な人間であったように思えるが、それと同時に、真に審美的でもあったようだ。

語注

世紀 制作年から考えれば、まだ二十七年しか経っていないが、先行作品である「詩ノート」の「二〇八六ダリヤ品評会席上一九二七、八、十六」には、「この世紀に入ってから曾って見ないほどの」とあることから二十世紀のこと。**石竹いろ** セキチクの花の色のこと。セキチクはナデシコ科の鑑賞用の多年草。日本では平安時代より栽培され、春にピンク色の花を咲かせる。

三年のひでり 花巻近辺では大正十三年から三年間、連続で早害が続き、貧農層の間では食糧が不足していたことを指すのだろう。

六条さては四角なる 六条や四角は、それぞれ大麦の品種のこと。「通常大別して二條麦・四條麦及び六條麦の三種となす。

二條麦は、充実せる穀粒二列をなして矢羽の觀あり。四條麦と六條麦とは、共に充実せる穀粒六列をなすも、四條麦にありては、不規則なる六列をなし、穂の頂より見れば四角形に見ゆるも、六條麦にありては、正しき六列にして、穂の頂より見れば、六角形に見ゆるの差あり。本邦在來種は、大抵六條にして、罕に四條麦もあれども、二條麦に屬するものは、絶えてなし」とのこと（佐々木祐太郎「大麦」『作物各論教科書 上』成美堂書店 大正七年三月）。

このときみは 冷夏に見舞われそうな農村を救済することより温泉建設にやつきとなつていゝ存在で、岡村民夫（後掲）は、当時の盛岡財界の中心的人物で、盛岡銀行頭取、盛岡電気工業社長、岩手軽便鉄道社長、花巻温泉社長などを務めた金田一（くにひと）国士（くにひと）だったのではないかとし、「賢治が金田一に労働学校設立のための投資を仰いだという逸話は、こうした詩からも信憑性がある」とする。その指摘は納得できるものの、宮沢家（ことに母方）は花巻温泉とも関係が深く、賢治が「何分にも私はこの郷里で財ばつと云はれるもの、社会的被告のつながりにはいつてゐる」（母木光宛書簡 昭和七年六月二十一日）という認識であったことを思えば、「きみ」への批判は、必ずブローメランとして自分への批判につながったこと

も抑えておくべきだろう。

徒衣ぜい食

「徒衣」とは唐衣に対する染色したり練ったりしてないただの衣のことを指すようだ。「徒衣徒食」の用例が吉川英治にあるが、おそらく無為徒食との混用だろう。無為徒食とはするべきこともせずにはいたずらに遊び暮らすことの意で、賢治も似た意味に使いたかったのだろう。「ぜい食」は、辞書類には見当たらない語だが、漢字で書けばおそらく「贅食」であり、贅沢な食事という意味であろう。

評釈

『新校本全集』に指摘はないが「詩ノート」の「二〇八六ダリヤ品評会席上 一九二七、八、十六、」が先行作品。前半が本作、後半は「五十篇」の「萎花」に文語詩化されている（「萎花」については『新校本全集』でも指摘がある）。無野詩稿用紙に書かれた下書稿(一)（タイトルは手入れ段階で「遊園地工作」）、その裏面に書かれた下書稿(二)（藍インクで㊦）の二種が現存。

昭和二年、花巻農学校の教え子だった富手一の依頼で、賢治は花巻温泉の花壇設計を引き受ける。花巻には、瀬川沿いに台温泉、豊沢川沿いに志戸平、大沢、鉛の温泉があったが、台温泉は交通が不便だったことから、台温泉から湯を引いて花巻温泉を作り、花巻駅から電車を通すこととした。温泉の他にも、

貸別荘や室内遊戯場、動物園、テニスコート、スキー場なども擁した一大リゾートで、昭和二年の大阪毎日新聞・東京日日新聞による「日本新八景」のコンテストでは全国第一位になっている。

しかし、「二〇三四」「ちぢれてすがすがしい雲の朝」一九二七、四、八、」で、賢治は「遊園地ちかくに立ちしに／村のむすめらみな遊び女のすがたとかはりぬ／そのあるものは／なかなばなれるポーズをなし／あるものはほとんど完きかたちをなせり」と、土地の風俗の悪化を嘆き、「一〇三三 悪意一九二七、四、八、」（下書稿(二)）では、「食ふものもないこの県で／百万からの金も入れ／結局魔窟を拵えあげる」として、自らが設計する花壇に、敢えて毒々しい色の花を並べようとしたことも描かれる。

実際、昭和四年七月十五日の「花巻温泉ニュース 創刊号」には、「息づまる様な、モダンガールの汗臭い匂いから逃れて、山間のいで湯に一浴して一盞傾け乍ら、欲しいのは矢つ張り女だ」などという言葉が書かれるようになっていた。

しかし、賢治は「遊び女」を批判しなかったわけではない。それは「五十篇」の「[夜をま青き蘭むしろに]」「雪の宿」「萎花」、「一百篇」の「[老いては冬の孔雀守る]」「歯科医院」「林館開業」「[燈を紅き町の家から]」などで、酌婦や芸娼妓の身の上を憐み、彼女たちに成り代わった詩まで作っ

ていたことに明らかだ。

また花壇設計する自分を正当化していたわけでもない。「詩ノート」の「一〇五五 「こぶしの咲き」 五、三、」で、「この巨きななまこ山のはてに／紅い一つの擦り傷がある／それがわたくしも花壇をつくつてゐる／花巻温泉の遊園地なのだ」と書いているように、自分自身が温泉に関わってしまっていることについて十分に自覚的であったたからだ。

では、先行作品と思われる「一〇八六 ダリヤ品評会席上」から見ていきたい。

西暦一千九百二十七年に於る

当イーハトーボ地方の夏は

この世紀に入ってから曾つて見ないほどの
恐ろしい石竹いろと湿潤さを示しました

為に当地方での主作物 *oryza sativa*

稲、あの青い槍の穂は

常年に比し既に四割も徒長を来し

そのあるものは既に倒れてまた起きず

あるものは花なく白き空穂を得ました

またかの六角シェバリエー、

芒うつくしい *Horadium* 大麦の類の穂は

畑地のなかで或は脱落或は穂のまゝ発芽を来し

そのとりいれればにも心せはしくあはたゞしいかぎりであ

りました

これらのすき間を埋めるために

諸氏は同じく湿潤にして高温な

気層のなかから、

四百の異なるラムプの種類、

Dahlia variaviris の花を集めて

この色淡い凝灰岩の建物の

石英燈の照明と浸液アルコールのかほりの中

窓よりは遙かに熱帯風の赤い門火の列をのぞみ

白いリネンで覆はれた卓につらねて

その花の品位を

われら公衆の投票に問はれました

すでに得点は数へられ

その品等は定められたのであります故に

いまわたくしの嗜好をはなれ

これらの花が何故然く大なる点を得たのであるか

その原因を考へまする

第一百号これはまことに二位を得たのであります

かつその形はありふれたデコラチーブであります

更にし細にその色を見よ

そは何色と名づけるべきか

赤、黄、白、黒、紫 褐のあらゆるものをとかしつ

ひとり黎明のごとくゆるやかにかなしく思索する

この花にもしそが望む大なる爆発を許すとすれば

或ひは新たな巨きな科学のしばらく許す水銀いろか

或ひは新たな巨大な信仰のその未知な情熱の色か

容易に予期を許さぬのであります

まことにこの花に対する投票者を検しましても

真しなる労働党の委員諸氏

法科並びに宗教大学の学生諸君から

クリスチャンT氏農学校長N氏を連れて

云はゞ一千九百二十年代の

新たに來るべき世界に対する

希望の象徴としてこの花を見たのであります

これに次では

第四百十 これは何たるつゝましく

やさしい支那の歌妓であらう

それは焦るゝ葡萄紅なる情熱を

各カクタスの瓣の基部にひそめて

よぢれた花の尖端は

伝統による奇怪な歌詞を叙べるのであります

更にその雪白にして尖端に至つて寧ろ見えざる水色を示す

ものは

その情熱の清い昇華を示すものであります

もしこの町が

未だに近代文明によつて而く混乱せられざる

遠野或はヤルカンドであらば

恐らくこの花が一位の投票を得たであります

更に深赤第三百五、

この花こそはかの窓の外

今宵門並に燃す熱帯インダス地方

たえず動ける赤い火輪を示します

最後に一言重ねますれば

今日の投票を得たる花には

一も完成されたるものがないのであります

完成されざるがまゝにそは次次に分解し

すでに今夕は花もその瓣の尖端を酸素に冒され

茲数日のうちには消えると思はれますが

すでに今日まで第四次限のなかに

可成な軌跡を刻み來つたものであります

イーハトーブ地方の冷害の予兆から始まり、どんな悲痛な詩

になるのかと思うと、饒舌にダリヤ品評会のコメントが語られ、

口語詩の下書稿に「ダリヤ品評会に於るスピーチ」と付けられ

ていたことにも窺えるような、ユーモアに富んだ軽やかな作品となつている。

佐々木民夫（後掲）によれば、「岩手日報」に昭和二年八月十二日から十四日まで、花巻町の精養軒で花巻町ダリヤ会主催の品評会開催の予告記事が載つており、「二〇八六ダリヤ品評会席上」の制作日付が八月十六日となつてのことから、この時の経験を書いたものであるようだ。

もつとも文語詩化にあつては、平山英子（「文語詩」「萎花」論1 漢詩の手法の意味）「論攷宮沢賢治8」中四国宮沢賢治研究会 平成十九年十二月）が指摘するように、昭和五年九月二十七日から二十九日まで、花巻温泉遊戯場で開催されたダリヤ品評会も参考になつている可能性はあるし、後述する一九三一（昭和六）年の冷夏に際しての詩篇「小作調停官」と表現が似ていることから、昭和二（一九二七）年の見聞や感想のみが文語詩に反映しているわけではないだろう。

さて「二〇八六ダリヤ品評会席上」の前半が本作「「歳は世紀に會つて見ぬ」」の先行作品となつていることは、題材や語彙の一致／類似から明らかだが、後半は「五十篇」所収の「萎花」となつている。

① 酒精のかほり硝銀の、

大展覽の花むらは、

肌膚灼くにほひしかもあれ、

夏夜あざらに息づきぬ。

② そは牛飼ひの商ひの、
はた鉄うてるもろ人の、

さこそつちかひはぐくみし、
四百の花のラムプなり。

③ 声さやかなるをとめらは、
おのおのよきに票を投げ、

高木検事もホップ噛む、
にがきわらひを頬になしき。

④ 卓をめぐりて会長が、
メダルを懸くる午前二時、

カクタス、シヨウをおしなべて、
花はうつゝもあらざりき。

口語詩の諧謔に富んだ部分を文語詩化したもののように感じられよう。中谷俊雄（「萎花」『宮沢賢治 文語詩の森 第三集』柏プラノ 平成十四年七月）が、「深刻な衣を脱ぎ捨てて、ユーモア・軽みの世界へと上つていった」と評しているように、「二〇八六ダリヤ品評会席上」の明るい部分が「萎花」に受け継がれているように見え、冒頭の冷夏を思わせる暗い部分だけ「「歳は世紀に會つて見ぬ」」に受け継がれたように見えるかもしれない。

しかし、町中の紳士淑女に値踏みされ、午前二時には萎んでしまふ花とは、笑いを売ることを仕事とする女性たちをアナロジカルに表現したものではないだろうか。

賢治は同時期に「詩ノート」に「二〇七一」「わたくしども

は」一九二七、六、一、」を書いていますが、ここでは二十銭で夫が買ってきた花を、二円で売ったのだと「ふしぎな笑ひやうを」した妻が、「萎れるやうに崩れるやうに一日病んで没くな」という話を書いている。「花」を売るとは、つまり売春を意味するのではなかっただろうか。

詳しくは『五十篇評釈』をご参照いただきたいが、明るく見える「萎花」が、暗い側面を持っていたように、本稿では、暗く見える「歳は世紀に曾って見ぬ」が、案外、明るい側面を持っていたのではないか、という提言を試してみたい。

「歳は世紀に曾って見ぬ」の明るさと言えば、冷夏が心配される一九二七年の風景を「石竹いろ」と書いていることである。石竹と書くと文字面が重々しいが、中国原産のナデシコのこと、石竹色とは、ピンク色のことだ。

賢治は「石竹いろの花のかけら／さくらの並樹になつたのだ」(「小岩井農場」『春と修羅(第一集)』)や、「このかゞやかな石竹いろの時候」(「北上山地の春」『春と修羅(第二集)』)のように、北国に訪れた春を示す色として使っている。

もちろん賢治のことだ。春を手放して礼賛せず、性欲が頭を擡げる時期であることも意識しており「石竹いろの動因だった」

(「三三六 春谷暁臥 一九二五、五、一一、」『春と修羅(第二集)』)と、性欲を暗示させる際にも石竹色を使っている。

「二〇八六 ダリヤ品評会席上」では「この世紀に入つてか

ら曾って見ないほどの／恐ろしい石竹いろと湿潤さを示しました」と、この上なく恐ろしい冷夏の襲来を石竹色にたとえていたが、冷夏における田園風景を石竹色(＝ピンク色)にたとえるのは「二〇八六 ダリヤ品評会席上」だけではなかった。

昭和六年頃に使われていた「兄妹像手帳」に「小作調停官」とタイトルのある次のような作品が書かれている(『新校本全集』では「補遺詩篇Ⅱ」として第六巻に収録されている)。

西暦一千九百三十一年の秋の

このすさまじき風景を

恐らく私は忘れることができないであらう

見給へ黒緑の鱗松や杉の森の間に

ぎつしりと気味の悪いほど

稲をだし粒をそろへた稲が

まだ油緑や橄欖緑や

あるひはむしろ藻のやうないろして

ぎらぎら白いそののしたに

そよともうごかず湛へてゐる

このうち潜むすさまじさ

すでに土用の七日には

南方の都市に行つてゐた画家たちや

ピロなる楽師たち

次々郷里に帰ってきて

いつもの郷里の八月と

まるで違った緑の種類の豊富なことに愕いた

それはおとなしいひわいろから

豆いろ乃至うすいピンクをさへ含んだ

あらゆる緑のステージで

画家は曾って感じたこともない

ふしぎな緑に眼を愕かした

けれどもこれら緑のいろが

青いまんまで立ってゐる田や

その藁は家畜もよろこんで喰べるではあらうか

人の飢をみたすとは思はれぬ

その年の憂愁を感じるのである

一九三一（昭和六）年の冷夏は、事実「すさまじき」ものであり、東北地方に大きな打撃を与え、賢治自身にも大きなショックを与えた。しかし、小作調停官に託した風景の見方は、どうだろう。どこか楽しそうに感じられないだろうか？

たしかに「すさまじき風景」とも書いており、悲惨な田園地方を描いているのだが、この惨状を画家や音楽家に見せたら、その緑の種類の豊富さに驚いて、「曾って感じたこともない」（この語も「歳は世紀に曾って見ぬ」に通じるところがあ

る）ものを感じるのではないかというのは、つまり芸術的感興というものである。本来なら、この場に招聘すべきは、植物学者か農学者、あるいは政治家ではないかと思われるが、賢治がこの風景を見せたがった相手は、果たして芸術家であったのだ！

いや、そんなはずはない。自分の命を「みのりに棄てばうれしからまし」と辞世で詠んだ賢治が、農村の惨状を芸術的感興を以て描こうなどと言うわけはないと思われるかもしれない。が、やはり「兄妹像手帳」に書かれた「丘々はいまし鋳型を出でしさまして」でも、次のように書かれている。

ことし緑の段階のいと多ければと

風景画家ら悦べども

みのらぬ青き稲の穂の

まくろき森と森とを埋め

「二字空白」のさまの雲の下に

うちそよがぬぞうたてけん

あゝ野をはるに高霧して

イーハトヴ河

ましろき波をながすとや

もちろん賢治が農村の不幸を喜ぶ人間だったなどと言いた

いわけではない。しかし浜垣誠司（宮沢賢治における「倫理」と「美」 <http://www.ihatov.cc/blog/archives/2020/01/03/>）も書くように、「賢治という人は、上のような倫理性とは別の側面として、とにかく「美しいもの」には理屈抜きに陶醉してしまうところがあつたのも事実だと思います。何かに感動すると、「ほほーっ」と叫んで飛び上がったたり踊り出したりしたとか、かなりのお金をかけて浮世絵（春画も含む）やクラシック音楽のSPレコードを蒐集していたとかいうところなどは、彼の倫理とは全く別の問題で、いったん「美」に魅せられると我を忘れてしまう側面もあつたということかと思えます」ということである。

浜垣も言及している「大礼服の例外的効果」は、高等農林学校の校長に向き合う賢治とも思われる「富沢」の心理を綴った小品だ。「国体」の解釈をめぐって二人が激論を交わすのかと思つたところで、富沢は校長の大礼服に施された「こまやかな金彩」が「明るい雪の反射のなかでちらちら顫へ」るのを見て恍惚としてしまい、対立が雲散霧消してしまうという。究極の平和主義とも言えるが、まるで物語の体を成していないとも言えそうだ。

小沢俊郎（「成りてはやがて崩るてふ」『小沢俊郎宮沢賢治論集3』有精堂 昭和六十二年六月）も、工事を何度やり直しても、崩れてしまう化物丁場という綽名のある難所について書

かれた小品「化物丁場」について、「凍える寒さの中で熱の入らない仕事をする人夫たちの労働の苦しきも忘れていよう」であるとし、美意識という書き方はしていないが、「あの思いやりの深い賢治がそういうふうな立場で書いているのも、前に述べたような地名や地理への興味の方がこの随筆執筆の中心動機だからでなからうか」とまとめていた。

賢治の鋭敏さは、自分が花壇設計をしながら「賤舞の園」を作る仕事だということに気づき、「歌ひめ」たちにエールを送らないではいられなくなる。

三年の早害の後に、冷夏が予想されるとなれば、農業技術者としても心配せざるを得ないが、鋭敏な賢治としては、冷夏が訪れそうだという田園風景の美しさにも恍惚としてしまうのだ。

風がどうと吹いてぶなの葉がチラチラ光るときなどは度十はもううれしくてうれしくてひとりで笑へて仕方ないのを、無理やり大きく口をあき、はあはあ息だけついでごまかしながらいつまでもいつまでもそのぶなの木を見上げて立つてゐるのでした。

時にはその大きくあいた口の横わきをさも痒いやうなふりをして指でこすりながらはあはあ息だけで笑ひました。なるほど遠くから見ると度十は口の横わきを搔いてゐる

か或ひは欠伸でもしてゐるかのやうに見えましたが近くではもちろん笑つてゐる息の音も聞えましたし唇がピクピク動いてゐるのもわかりましたから子供らはやっぱりそれもばかにして笑ひました。

「度十公園林」の主人公・度十は「少し足りない」と囁かれる存在だったが、自然の美しさを甘受する能力は抜群で、いや、抜群すぎるがゆえに、その感動を抑えるのに苦労させられる存在であった。度十の感覚が賢治の感覚の反映であったことは言うまでもあるまい（「兄弟像手帳」一九頁には Kenji Miyazawa と書かれている）。

先行研究

小沢俊郎「紅い擦り傷」（『小沢俊郎宮沢賢治論集3』有精堂昭和六十二年六月）

佐藤勝治「賢治随想（二）」（『やさしい研究賢治文学のよろこび2』寂光林昭和六十二年十月）

伊藤光弥「受難の花 金魚草とフロックス 南斜花壇と賢治の憂鬱」（『賢治研究69』宮沢賢治研究会 平成八年四月）

佐々木民夫「花巻の温泉と宮沢賢治」（『宮沢賢治研究 Annal vol.16』宮沢賢治学会イーハトーブセンター 平成十八年三月）

川村湊「宮沢賢治『銀河鉄道の夜』花巻（岩手）」（『温泉文学論』新潮新書 平成十九年十二月）

岡村民夫「賤舞の園を供すとか」（『イーハトーブ温泉学』みず書房 平成二十年七月）

伊藤眞一郎「凝灰岩もて畳み杉植ゑて 文語詩稿『林館開業』」（『宮沢賢治』旅程幻想くを読む』朝文社 平成二十二年十月）

一月）

信時哲郎「萎花」（『宮沢賢治「文語詩稿五十篇」評釈』朝文社 平成二十二年十二月）

島田隆輔A「37萎花」（『宮沢賢治研究 文語詩稿五十篇』訳注4）〔未刊行〕平成二十三年八月）

島田隆輔B「命名の意図 文語詩稿「電気工夫」生成の一面」（『論攷宮沢賢治10』中四国宮沢賢治研究会 平成二十四年一月）